



藝林畫譜第廿集船之卷編纂について

地上を舞臺とせる人類が水を涉らむが爲に造つた有史以前の獨木舟より、現代の汽船軍艦になるまで、之が構造は勿論裝飾より用途に到るまで數限りなき變遷と驚くべき進歩とがあつたのは當然であります、殊に四圍水を以て包まれたる我島帝國は歐露の大陸に比し船の必要はより切實なものがあつたのは云ふ迄もありません、蓋し海外文化の移入なり、日本文化の移出は共に船の賜物で、人類が船に親しむ所以は決して偶然ではありませぬ、即ち人類の福祉を増進した此船を前代藝術家は如何に取扱つたか、本篇十三葉は實に其代表的なものと云つても過言ではありませぬ。

大正十二年四月

編者しるす

船之卷内容目次及略解



第一圖 司馬江漢の黒船

本圖は京都市高倉四條下る采野爲吉氏所藏の司馬江漢筆黒船の横物畫幅にて當時の寫生畫として中の珍であります。江漢名は峻字は君開、春波樓と號し、初め揚州刺史に及び二世春信と號し、又谷文晁に學ぶ、當時洋畫未だ附けず、輸入畫は外科醫法を傳ふるのみであつた、江漢即ち長崎に到り、油畫及び銅版術を學び花地に洋字を用ふるなど實に我國洋畫の率先者である、大正七年十月十日、十二才にて歿した。

第二圖 吳 春 の 船

本圖も亦第一圖と同じく采野爲吉氏の愛藏せる松村吳春筆の山水で人物より京水に到るまで全幅風雨の氣分横溢せるものであります。(吳春傳略)

第三圖 傳 光 興 の 船

本圖は洛北紫野大徳寺山内高洞院所藏の六曲金碧小屏風に山王祭の圖をものしたもので今は京都帝室博物館に出陳されて居ります。(光興傳略)

第四圖 詩 繪 の 舟

兩圖は京都市元警願寺堀川上る瑞龍寺所藏の舟形辨當箱一具の詩繪の部分寫眞にて昭憲皇太后の御愛用品であつたものであります、即ち第四圖は外箱の左側面と組重箱の詩繪で、第五圖は外箱上部と徳利二本及小皿十客分の詩繪であります。

第六圖 傳 元 信 の 軍 船

兩圖は京都新嘉祿淨土宗西山派の本山警願寺所藏の傳元信筆六曲屏風、八鶴合戦圖で第六圖は片双の二幅、第七圖は片双の部分であります。

第八圖 光 吉 の 船

本圖は京都帝室博物館所藏の土佐光吉筆金色紙着色源氏物語帖(二帖)の部分であります、筆者光吉は土佐宗家の畫人にて光重の二男、初め名は久吉又は刑部と稱し畫所預となり從五位左近將監に任ぜられ勅令により宮中の繪を作り妙手と稱せられた、後ち難産して泉州堺に移り慶長十八年五月、七十五才で歿しました。

第九圖 季 晟 の 船

本圖は京都市三條衣洞、西村吉右衛門氏の所藏にて季晟筆絹本着色(五尺巾)龍華會の圖の部分であります。(季晟傳略)

第十圖 久 國 の 船

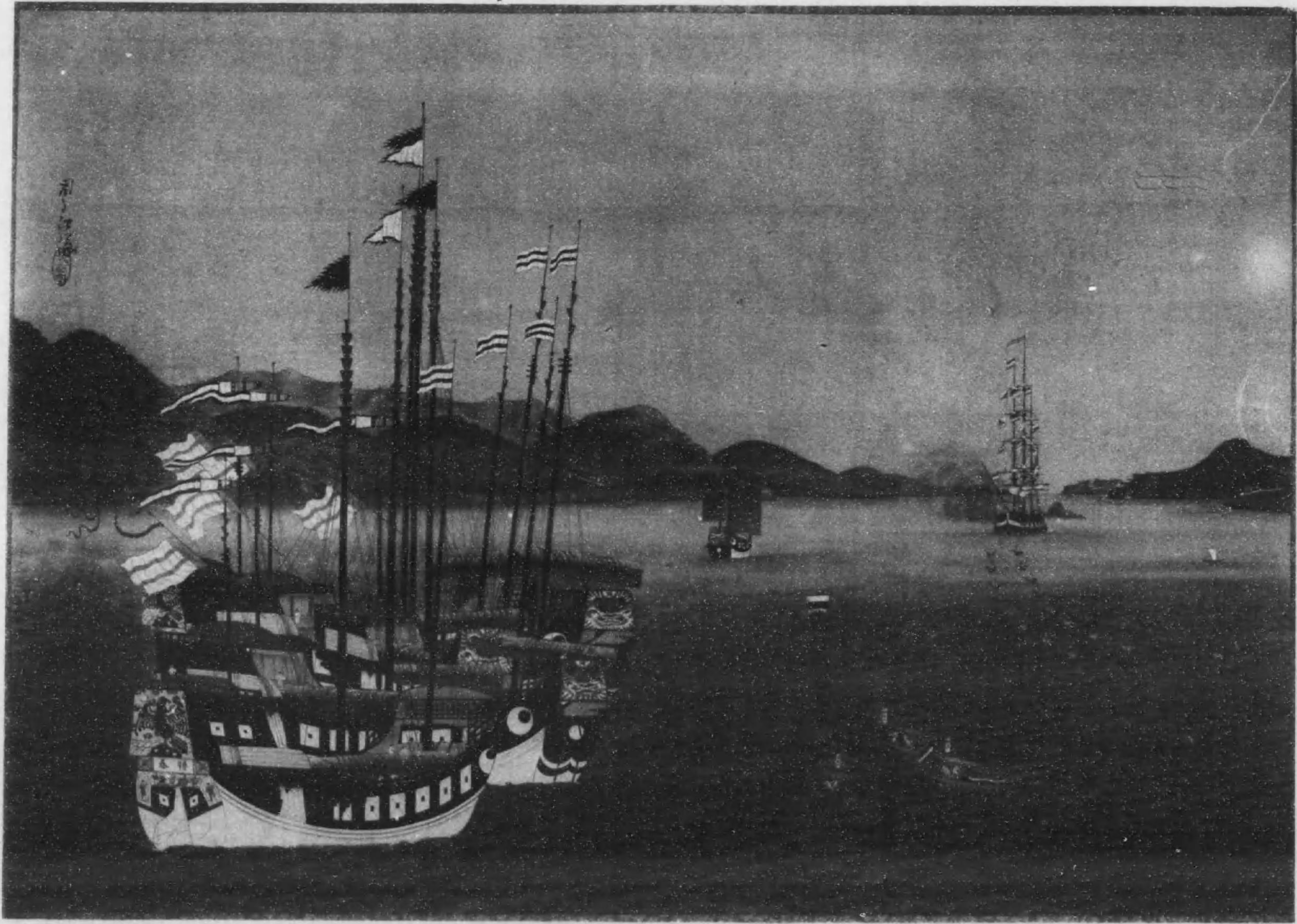
兩圖は京都市眞如堂眞正禪樂寺所藏の持部介久國筆、本着色繪卷『眞如堂雜記』三卷中の第一番部分圖であります、本帖繪圖は後柏原天皇外四筆と稱へ、京都帝室博物館に出陳されて居る、筆者持部介は大永頃の人でありますが其傳は詳らかでない。

第十二圖 錦 手 の 舟

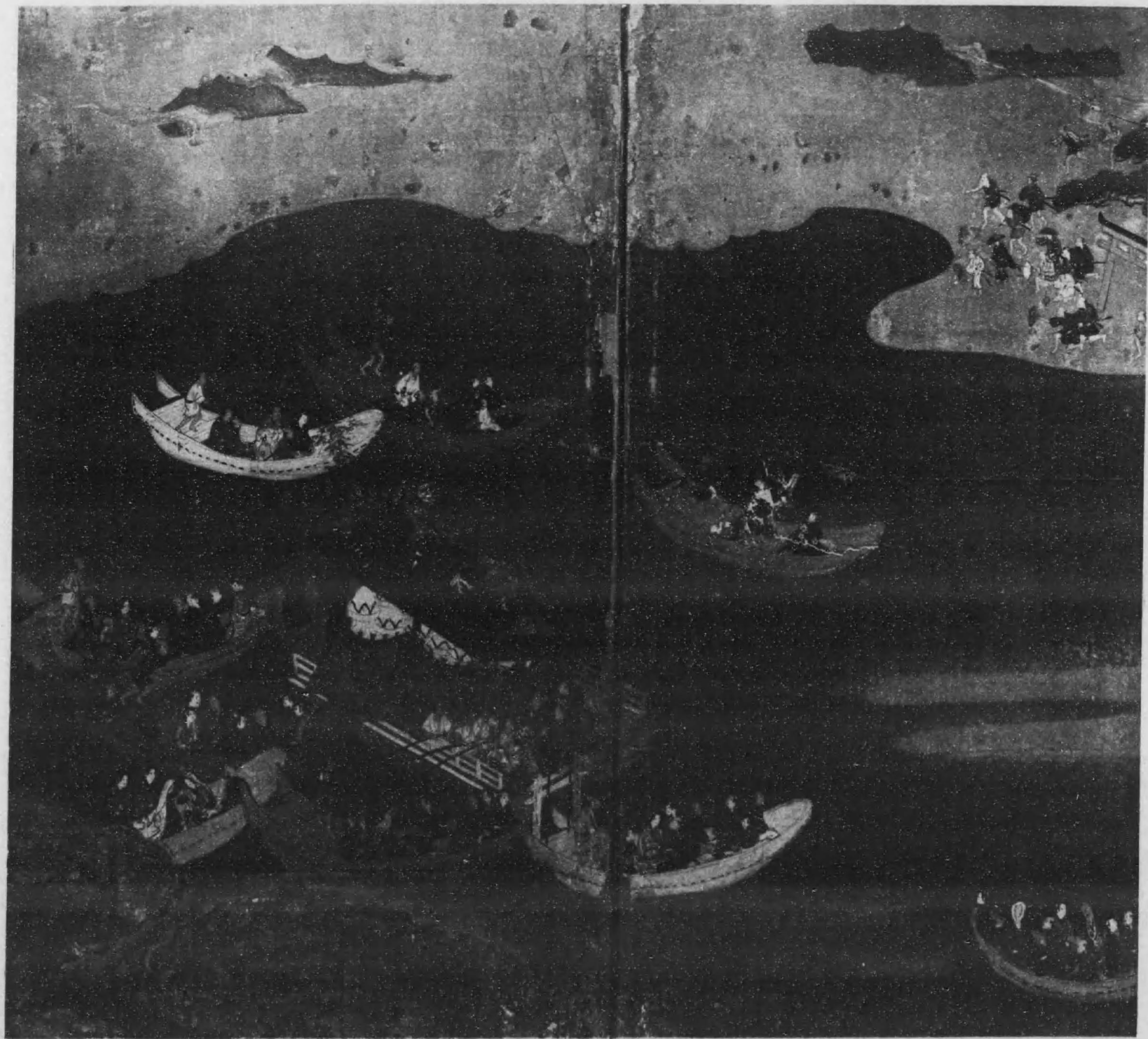
本圖は京都市知恩院所藏の錦手の花生表裏二面の圖であります。此花生は秀吉公の愛用品にて聚樂殿にありしものと傳へられて居る、桃山時代の代表的陶器の一であります。

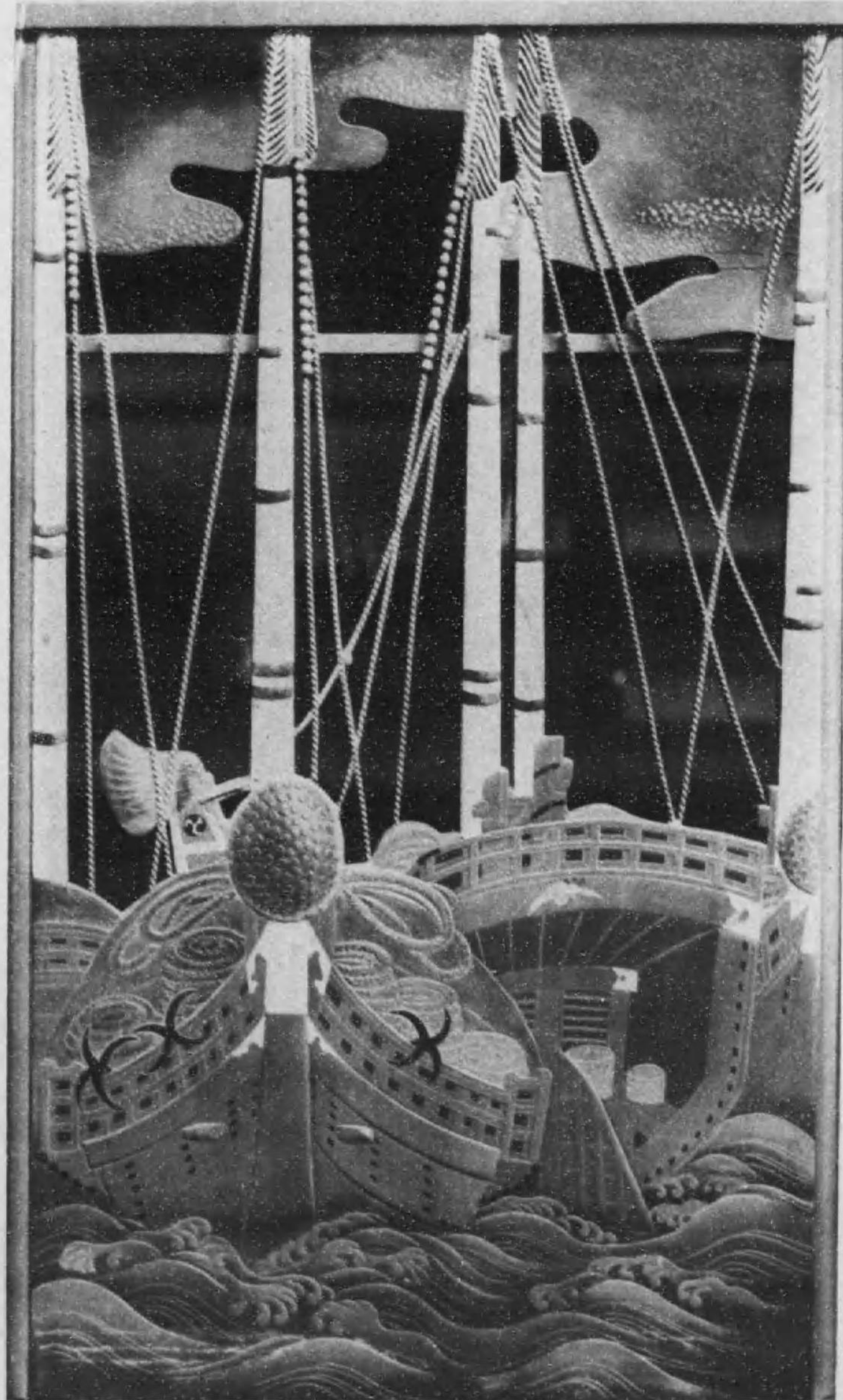
第十三圖 曼 陀 羅 の 舟

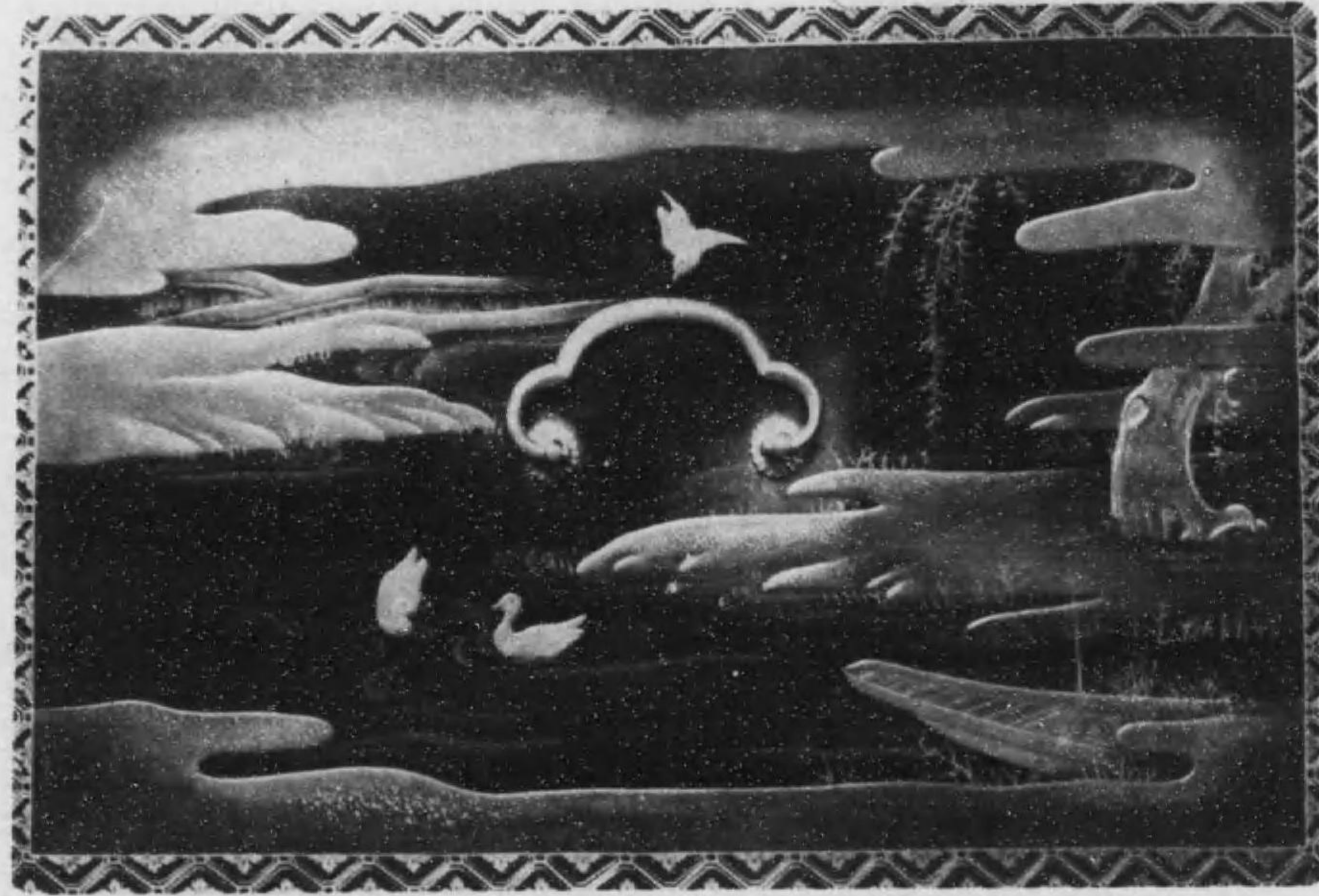
本圖は前圖同様知恩院所藏のものにて惠心僧都筆絹本着色阿彌陀經曼陀羅の一部分であります。



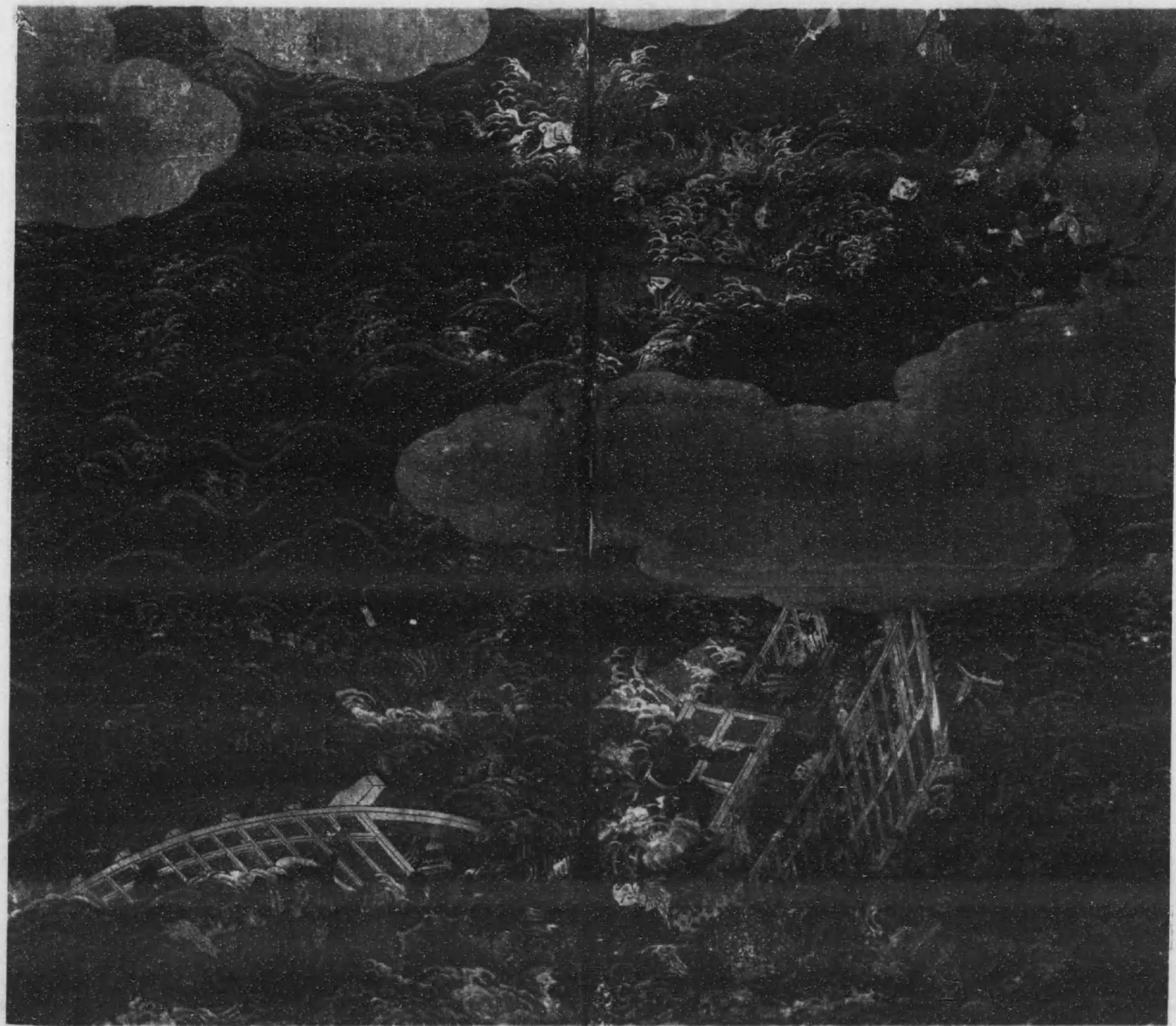


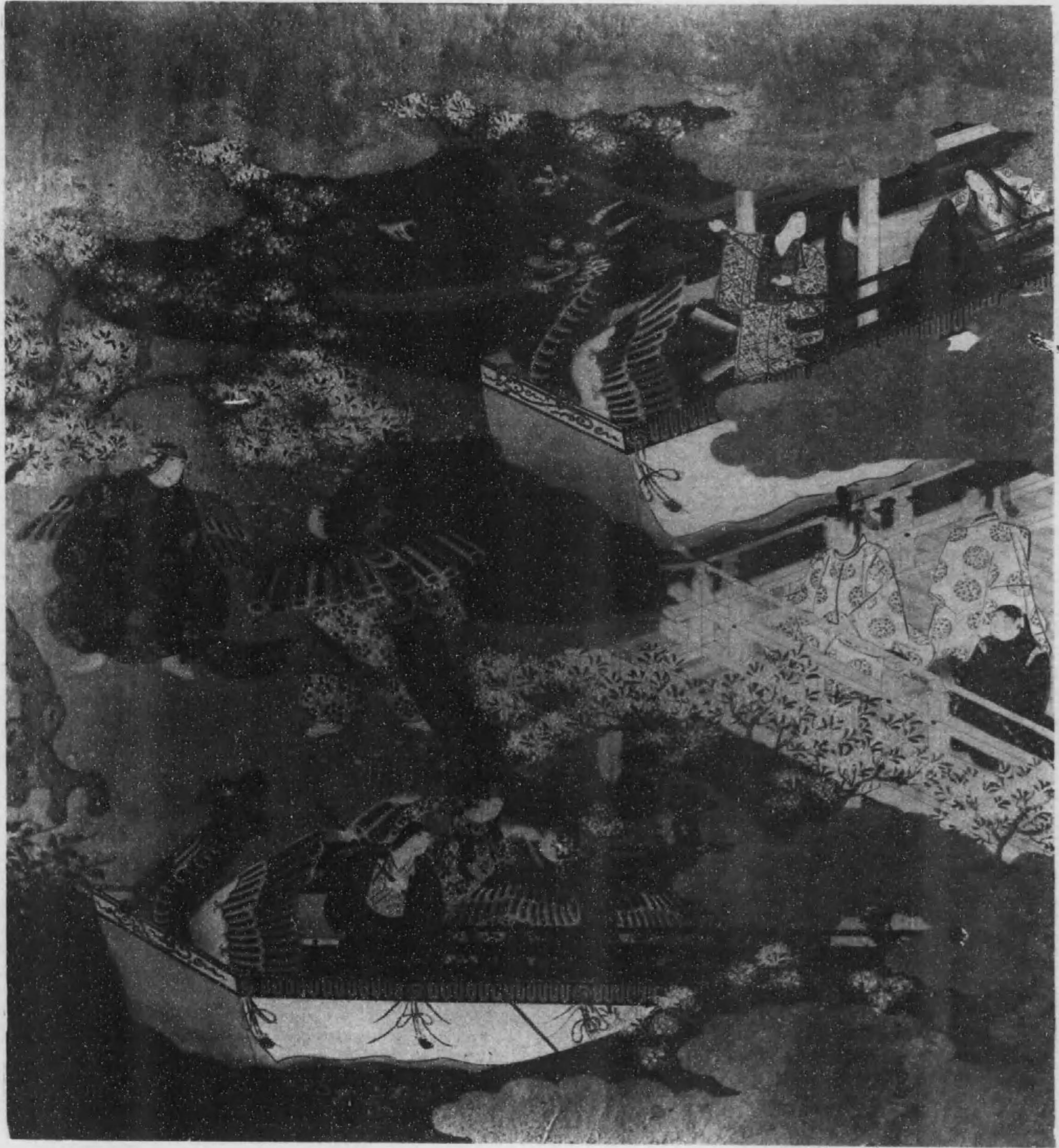


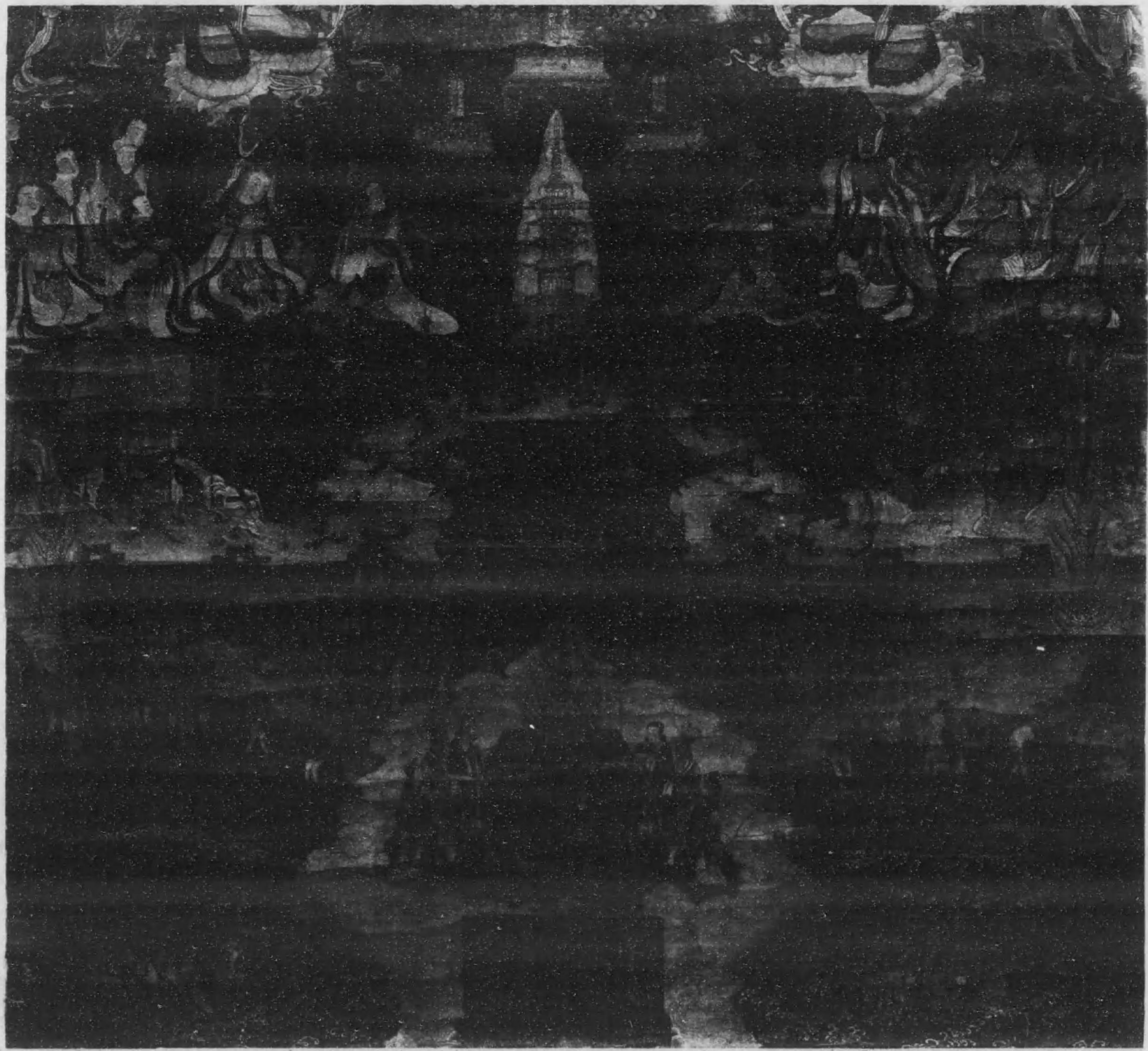




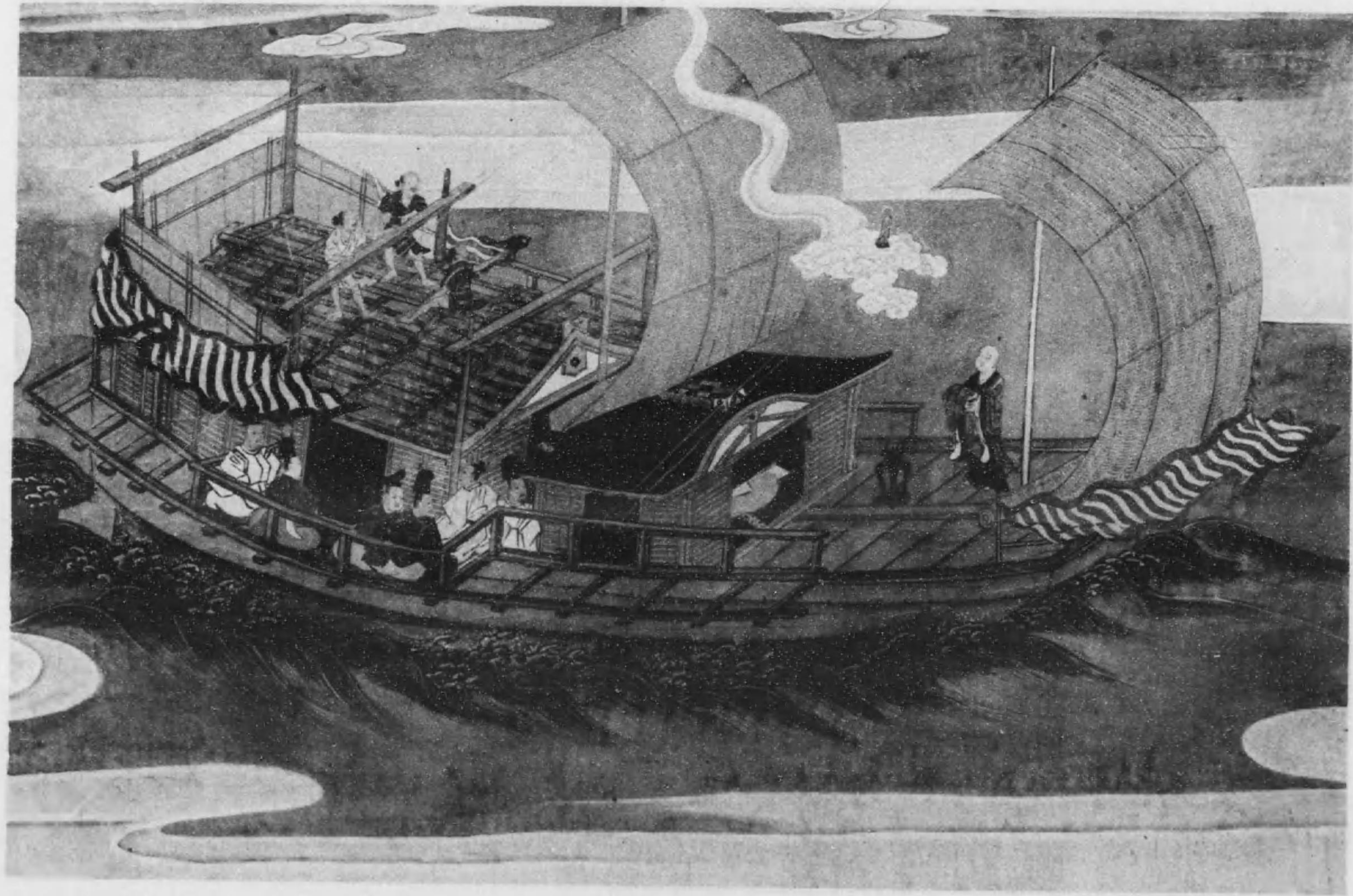




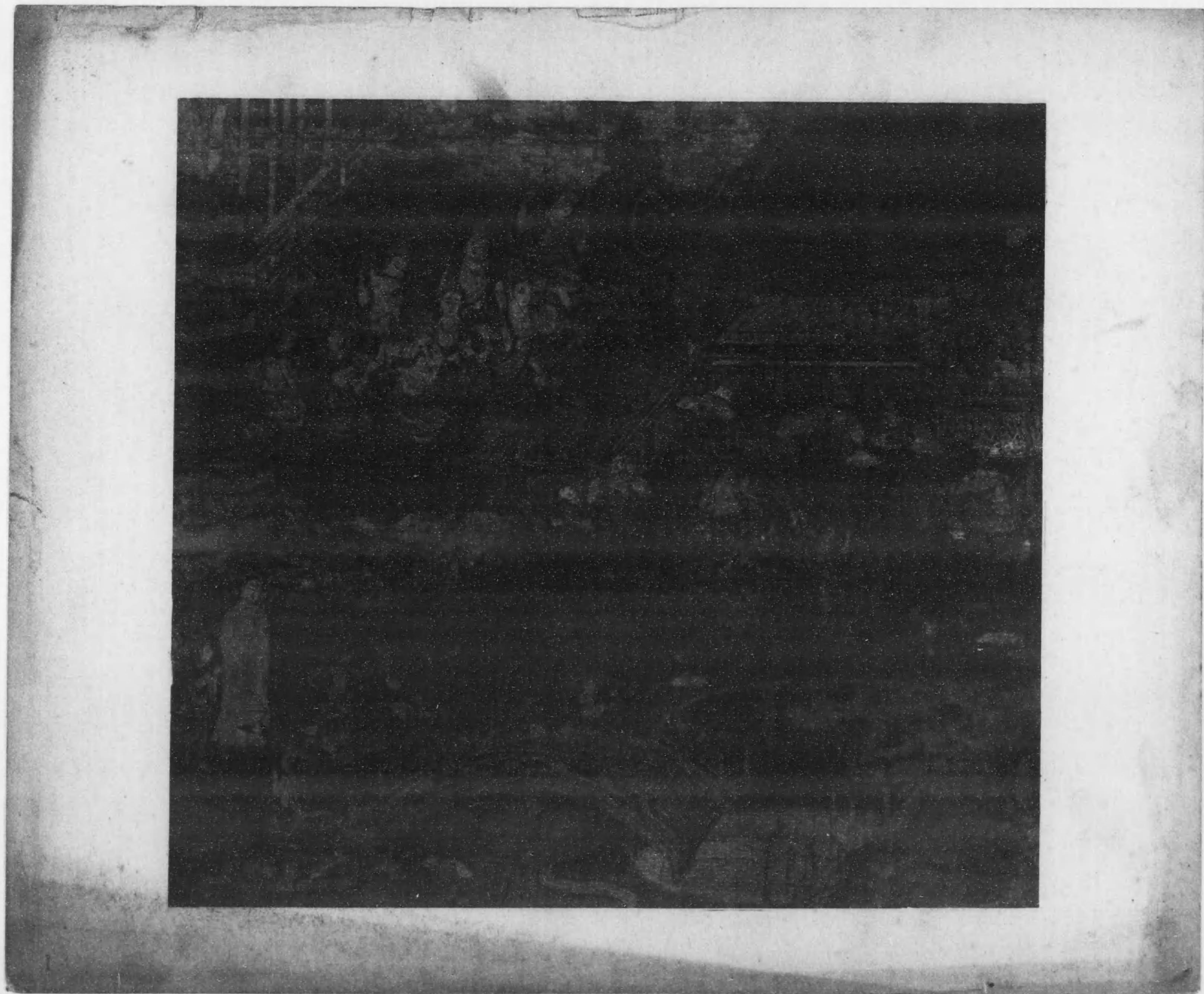












藝林畫譜第廿三集「十二支の巻」編纂について

易を知らぬ吾人が九星干支の哲理を語る事は出来ないが而も此種の思想は幾千年來依然として東洋の思想界に一大潮流となつて居る、随つて繪畫に圖案に十二支を取扱つたものは頗る多い、本書譜完結の期將に近からむとするに當り創刊以來殆んど取扱はなかつた動物中心の編纂を試み十二支を以て纏めたるは必らずしも無意義ではあるまると信する、ただ十二支以外特に巻頭に鹿を加へたるは内容紙數の内規を尊重したに過ぎぬ

大正十二年八月

編者しるす

「十二支の巻」内容目次及略解

第一圖 光琳の鹿

本圖は東京市故小林文七氏愛藏の光琳筆紙本二曲一対の片双にて豐麗なる畫趣味ふべきものがある。因に本圖は十二支以外のものであるが本編規定の紙數の關係上特に本圖を加へたものである。

第二圖 錢舜舉の鼠

本圖は東京市黒田侯爵家の珍藏せる錢舜舉畫帖の一葉にて絹本着色の唐畫である、筆者錢舜舉は元の人、玉潭と號し南宋嘗定間御賞の進士であり當時に於ける一大名匠であつた。

第三圖 始興の牛

本圖は洛西嵯峨大覺寺書院の杉戸にて琳派の名家渡邊始興の筆で識者間に定評ある名品である。始興は俗稱を求馬と云ひ近衛家の臣にて畫法を狩野派に受け後ち光琳の門に入り名手となつた、寶曆五年七月廿九日病歿した。

第四圖 永徳の虎

本圖は洛東釋林寺(永觀堂)方丈の金碧襖繪にて狩野永徳の筆として世に最も名あるものである。

第五圖 光琳の兔

本圖四面は共に洛西嵯峨大覺寺書院障子腰板に描ける光琳の作品にて薄に群兔の遊べる給有餘面中の四面である。

第六圖 岸駒の龍

本圖は洛南教王護國寺食堂の天井畫にて岸駒の作品中最も名高きものである。岸駒は金澤に生れ始め有栖川宮の侍臣となり後官人となりて越前介に任ぜられ晩年洛北岩倉に隠れ年九十にして從五位下越前守となる、天保九年十二月九日九十歳にて歿す、水屋の虎は世に定評がある。

第七圖 鳥羽僧正の蛇

二圖中、前者は洛西高山寺藏鳥羽僧正筆鳥獸畫帖の部分で、後者は同様に黒田家藏錢舜舉畫帖中の細漢畫の一部である。

第八圖 素絢の馬

本圖は京都本願寺所藏の山口素絢筆張良の圖である。素絢字名は齊と號し、通稱を武次郎と云ひ、京都の人、應舉の門に學び文政元

第九圖 山樂の羊

本圖は京都東福寺開山堂山樂筆杉戸の分である。

第十圖 牧溪の猿

本圖は洛東南神寺塔頭金地院茶室牧溪水墨の襖繪にて水中の明月を捉まむとする手長猿である。

第十一圖 應舉の鶏

本圖は京都祇園八坂神社秘藏の衝立にて圓山應舉作彩色双鶏の圖で世に最も名高きものである。

第十二圖 宗達の狗兒

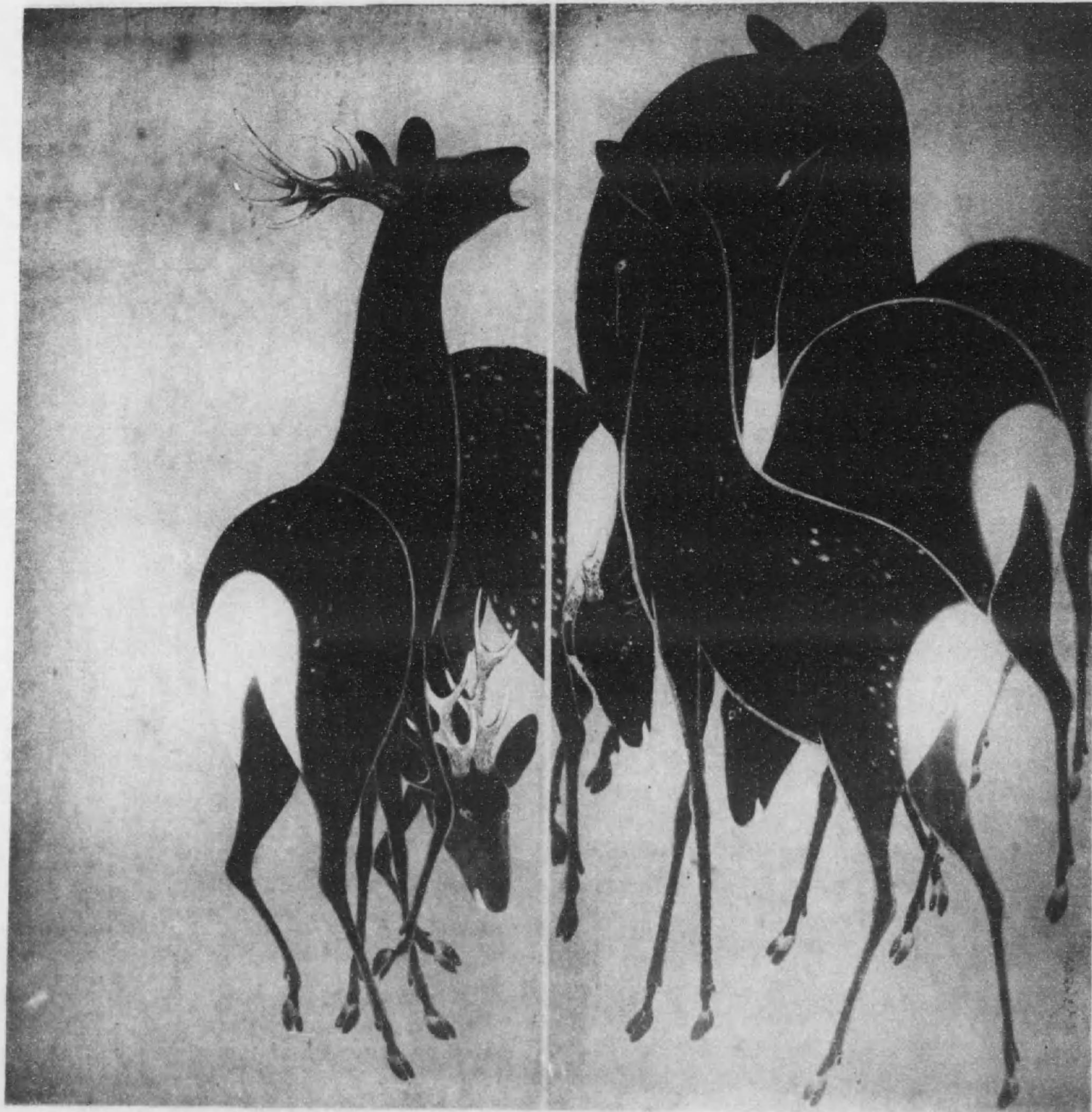
二圖の内前圖は東京市故岸光景氏の所藏である。後圖は京都相國寺開山堂杉戸、應舉作芭蕉に狗兒の部分である。

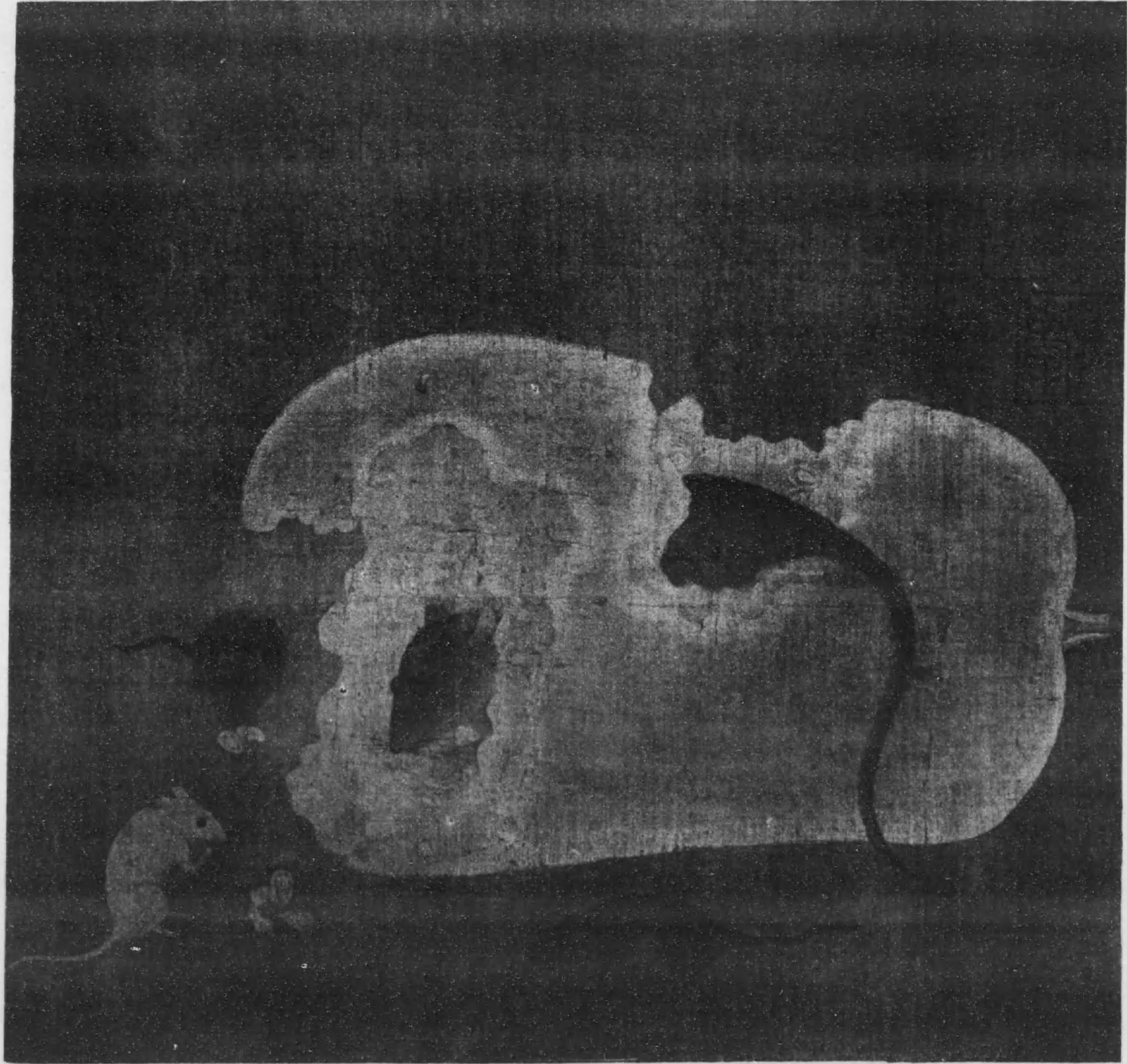
第十三圖 左下 友雪の猪

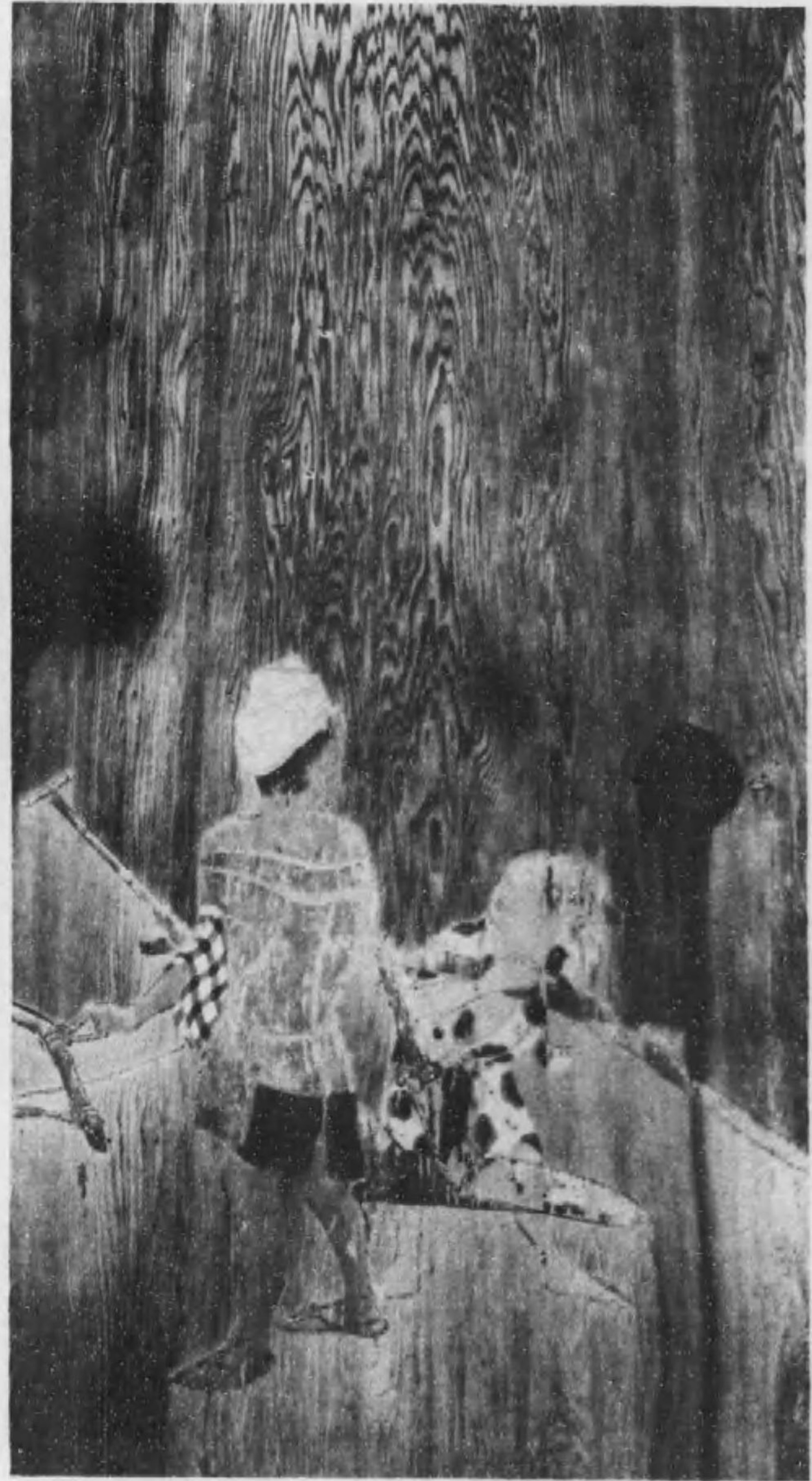
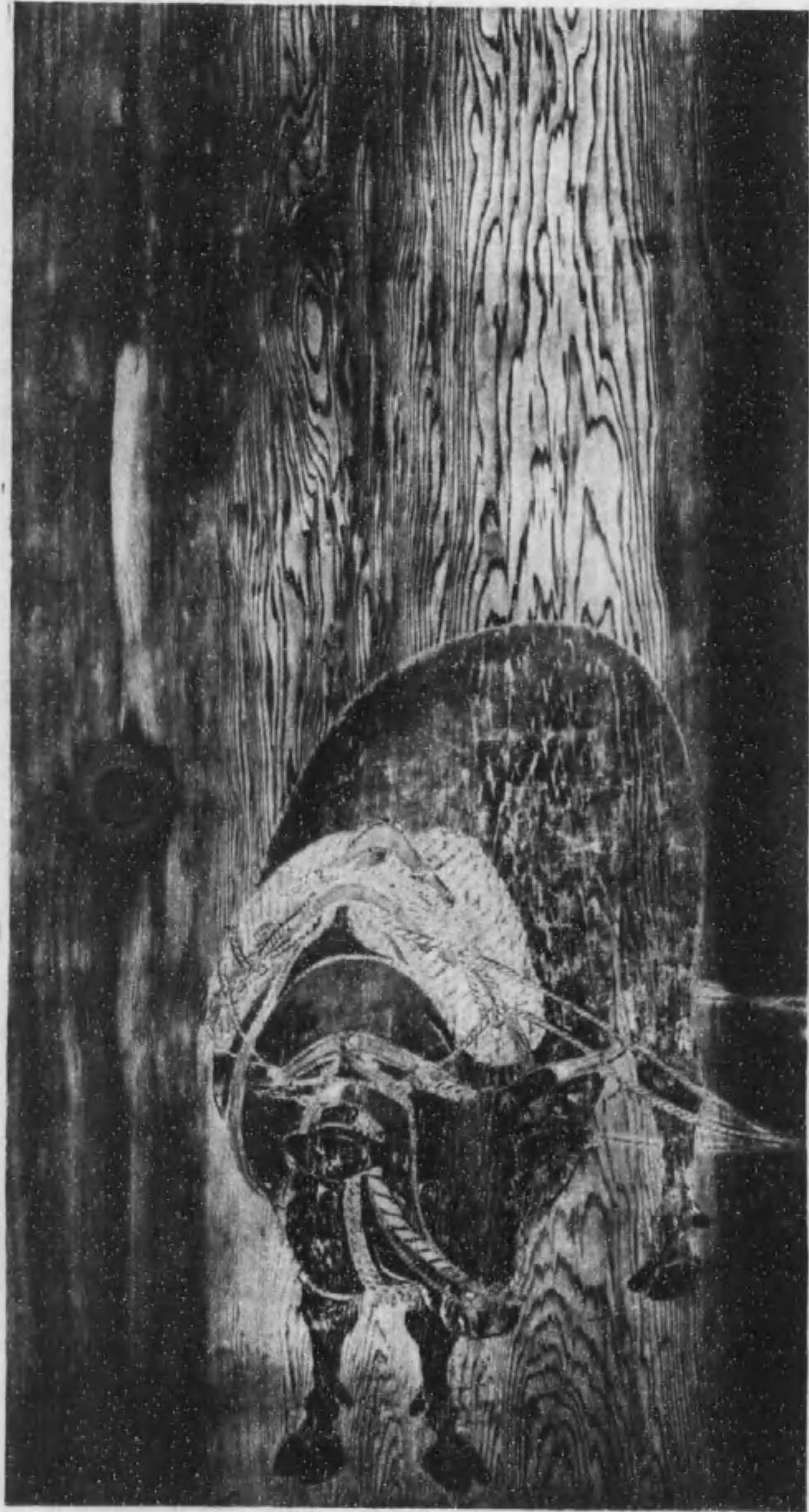
三圖中後山の猪は京都市安井、中村旭峯氏所藏で、鳥羽僧正の猪は高山寺鳥獸畫帖中の部分、友雪の猪は西本願寺變東間の壁畫、田邊圖の一部であります。

以上

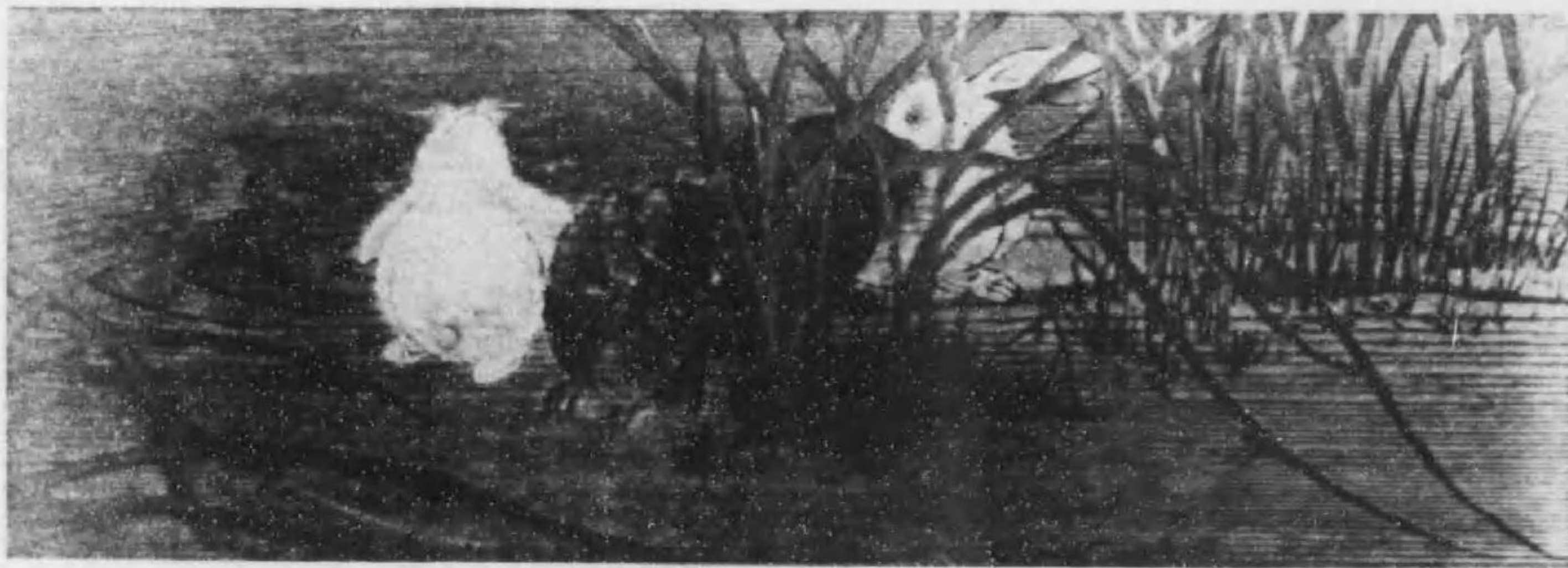
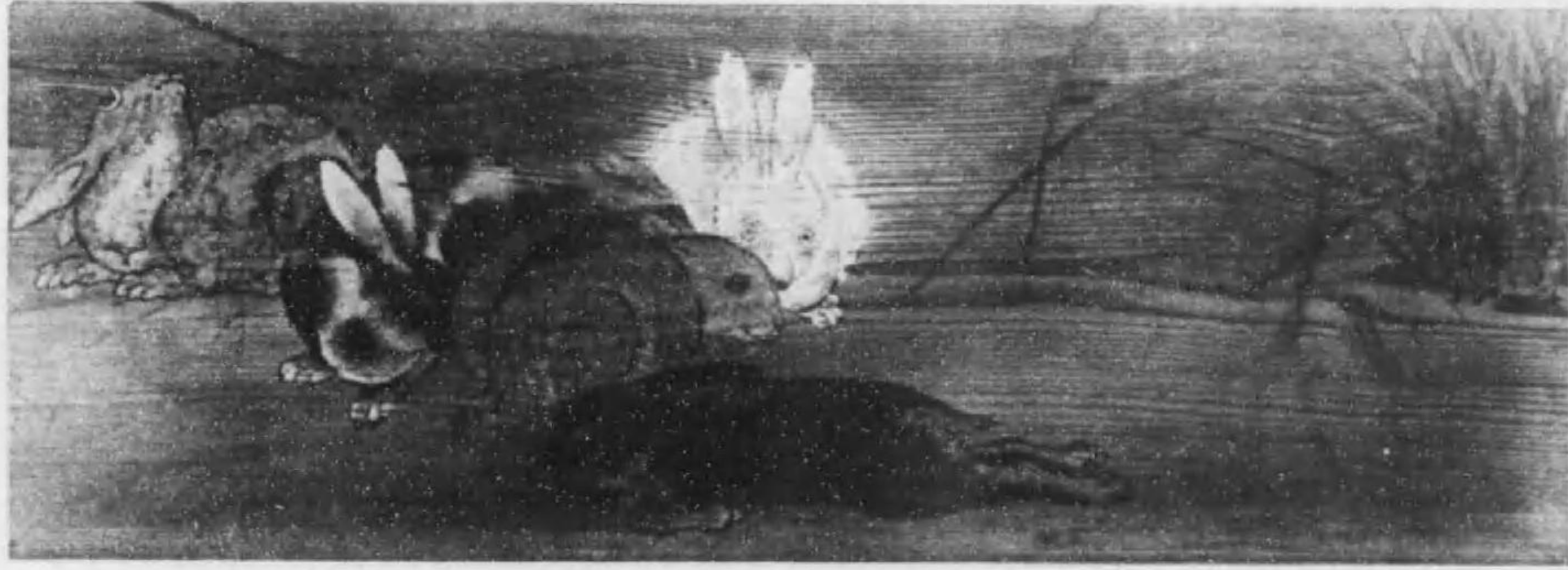


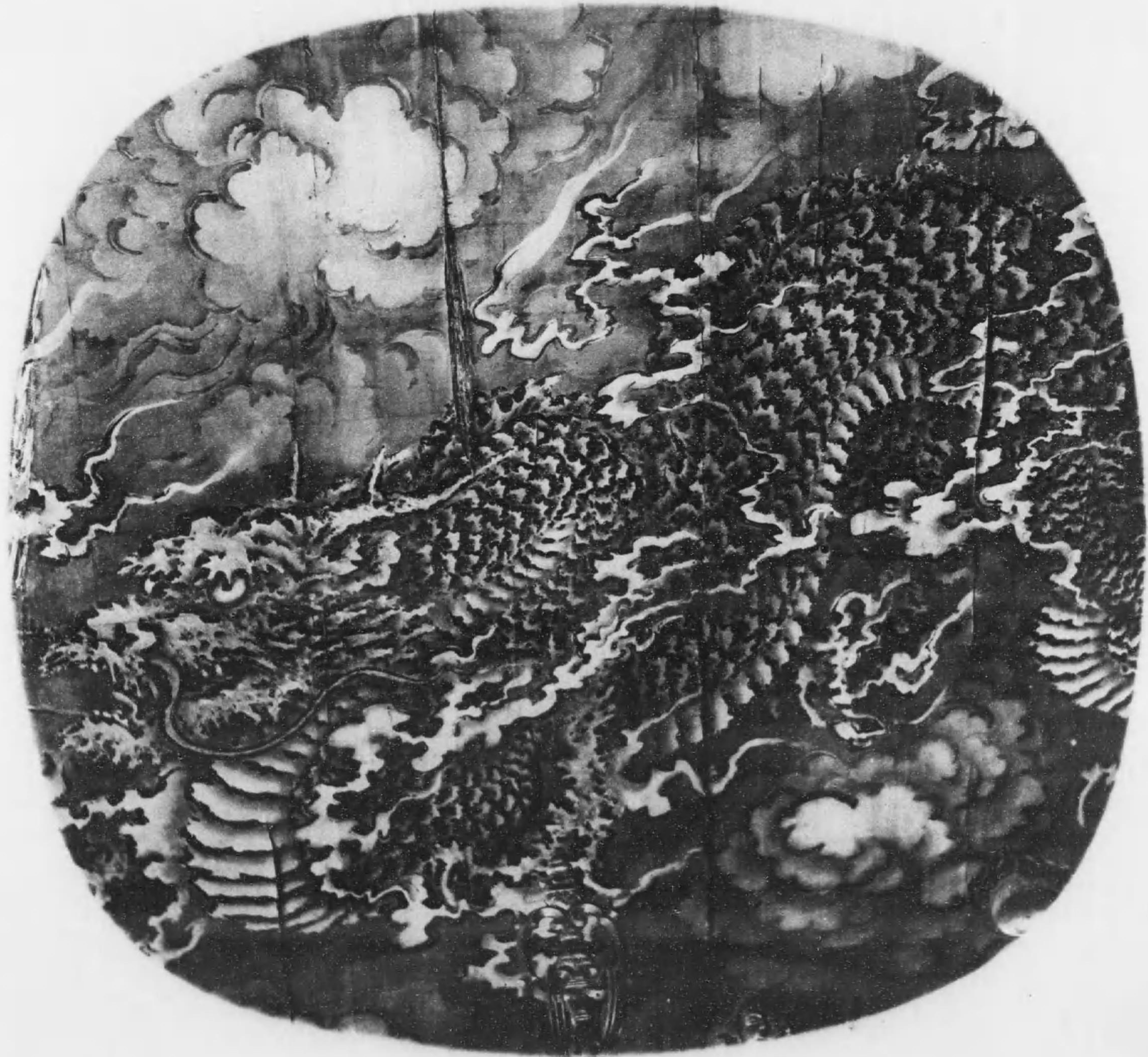






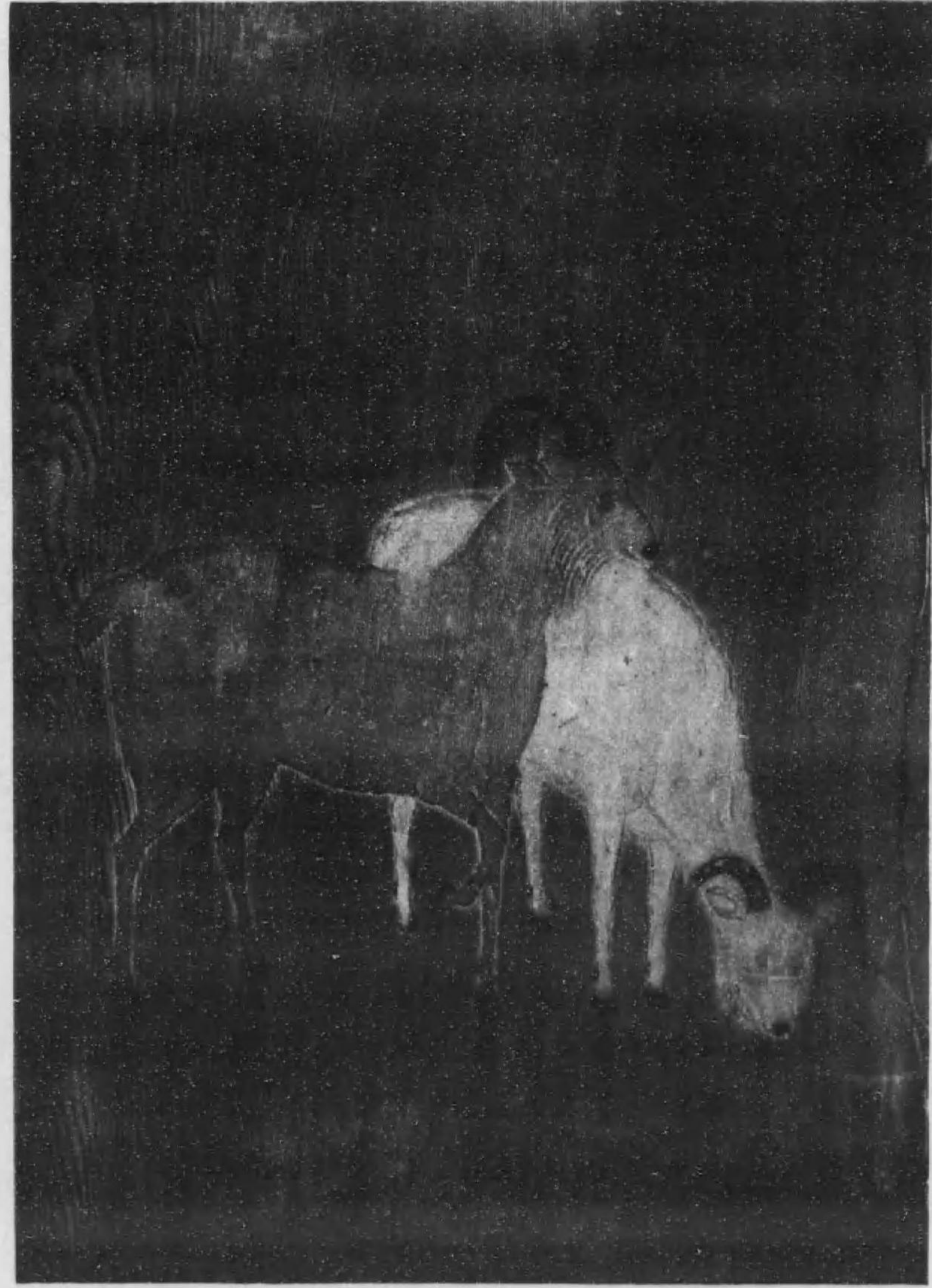
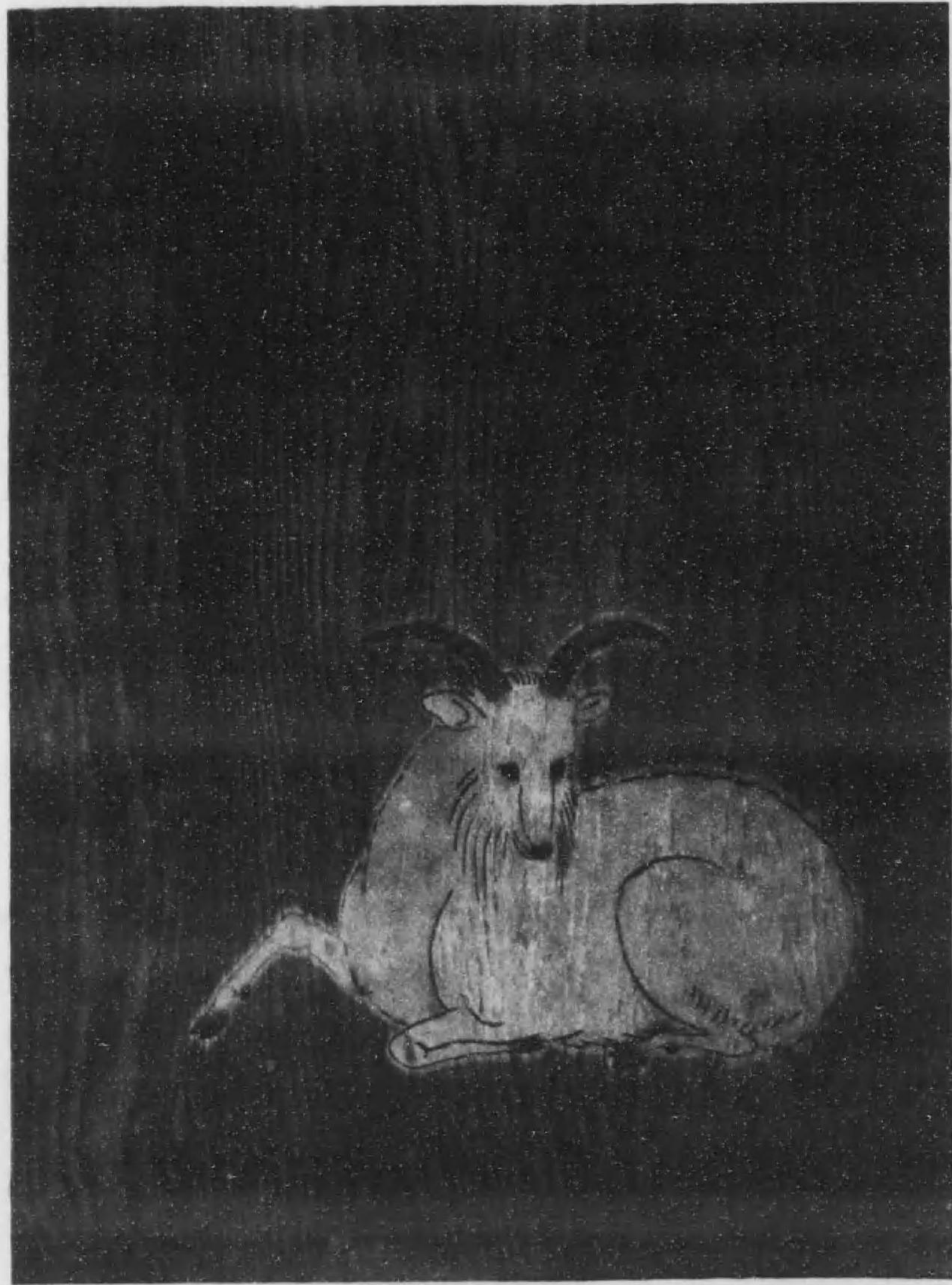






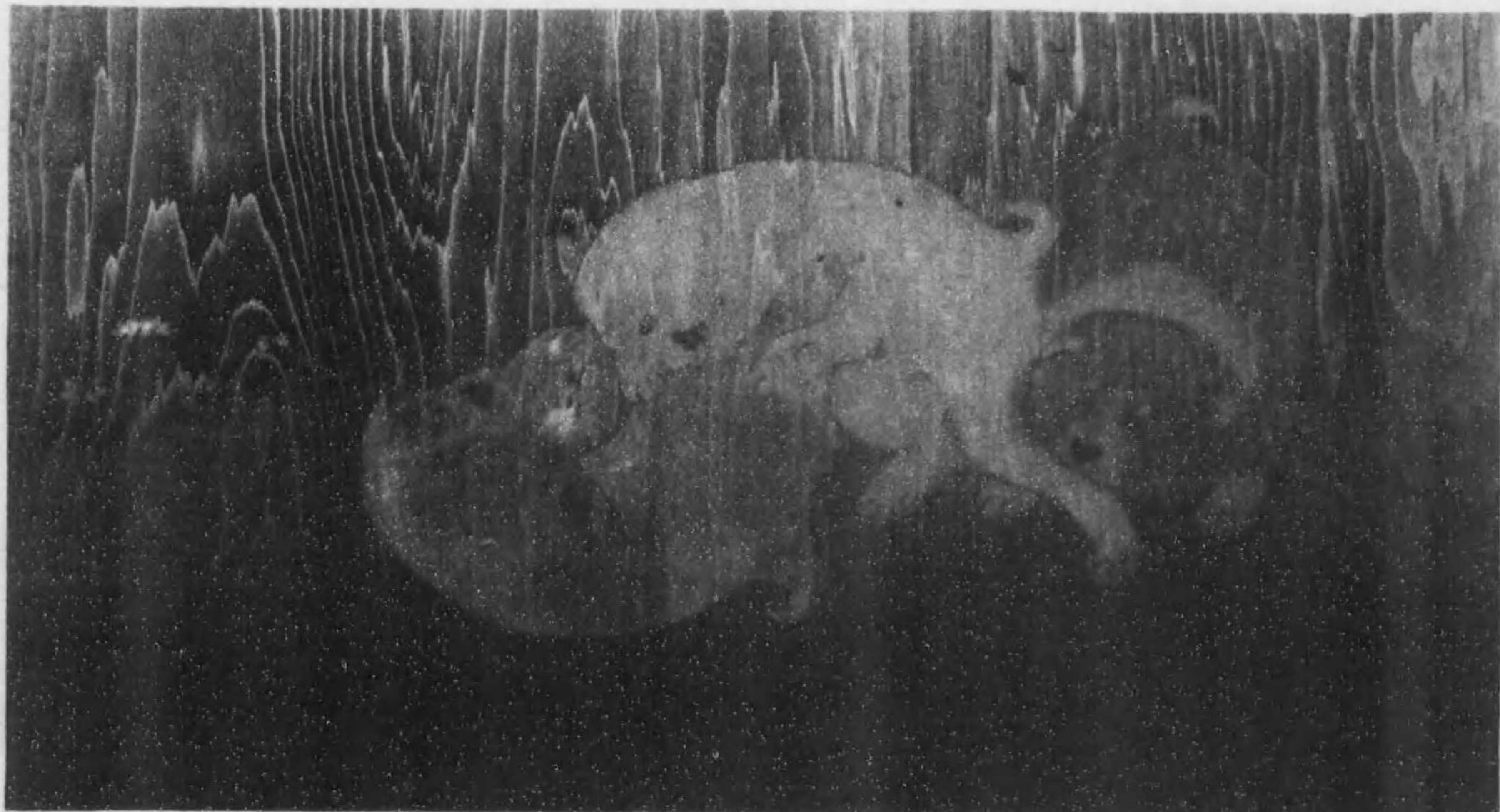














藝林畫譜第廿四集舞踊の巻編纂について

圓々たる満月の光りを浴びつゝ南爪棚を取り巻いて櫓から響く音頭の節に鄙びたる盆踊を樂しむ村嬢の無邪氣な姿容を想到して誰れか其田園藝術に恍惚たらざるものやあらひ、朱欄高臺の上錦繡の壯麗いかめしき間に舞ひ狂ふ舞樂の壯美さを味つて誰れか其貴族藝術に眩惑されざるものがあらうか、舞踊の技元來古今東西を問はず人間生活の上の偽らざる尊き感情の發露であるが我國の舞踊が常に獨自のもので何れの人種の追蹤をも許さざる点に於て實に世界に誇るべきものである、されば過去の作家も現代の作家も之を描いた人は極めて多い、今や藝林畫譜完結の第廿四集に於て從來取扱はなかつた人間生活の一面である廣義の舞踊を蒐録したのは必ずしも無意義ではあるまいと信ずる。

大正十二年九月

編者しるす

略解

第一圖 傳信實の延年樂

本圖は京都北野神社秘藏の國寶にて今は京都帝室博物館に出陳されて居る樹立の一面延年樂の圖である、作者は神社にて傳信實となつて居るが、一般には信實と認められて居る。

第二圖 宗達の舞樂圖

二圖共醍醐三寶院の名物屏風、野々村宗達筆二曲屏風の一面宛である。

第四圖 傳光長の祭禮樂

本圖は京都北野神社秘藏傳光長筆北野祭禮初卷の一部である。

第五圖 内膳の豊國祭圖

本圖は狩野内膳の筆にて京都豊國神社に藏せる六曲屏風の豊國祭禮圖の部分である。

第六圖 河内浦と敷手

河内は京都市東山臨濟宗尼門跡靈巖寺所藏の六曲屏風の部分にして珍らしき舞樂を描きたる点に於て歴史上最も價値あるものであるが筆者は不詳である、同寺は尼門跡なるを以て或は御所より賜はりたるものならむか、徳川中期の作である。

第八圖 筆者不詳の壬生狂言

本圖は京都市西陣浄土宗門跡三時智恩寺の所藏にて十二月繪巻の三月である筆者は未詳であるが圖書が興樂院家度会であり、技巧に於ても相當名家の手になつて居る事は争はれぬ。

第九圖 吉家の盆踊

本圖は京都六角島丸田中勳兵衛翁の藏、屏風士女遊樂圖の一部で日置吉家の筆と云つて居る。

第十圖 春章の紅葉狩

本圖は京都市新門前東山織西入松木翁右衛門氏の所藏せる春華筆紅葉狩の圖で絹本彩色の畫幅である。

第十一圖 筆者不詳の男舞

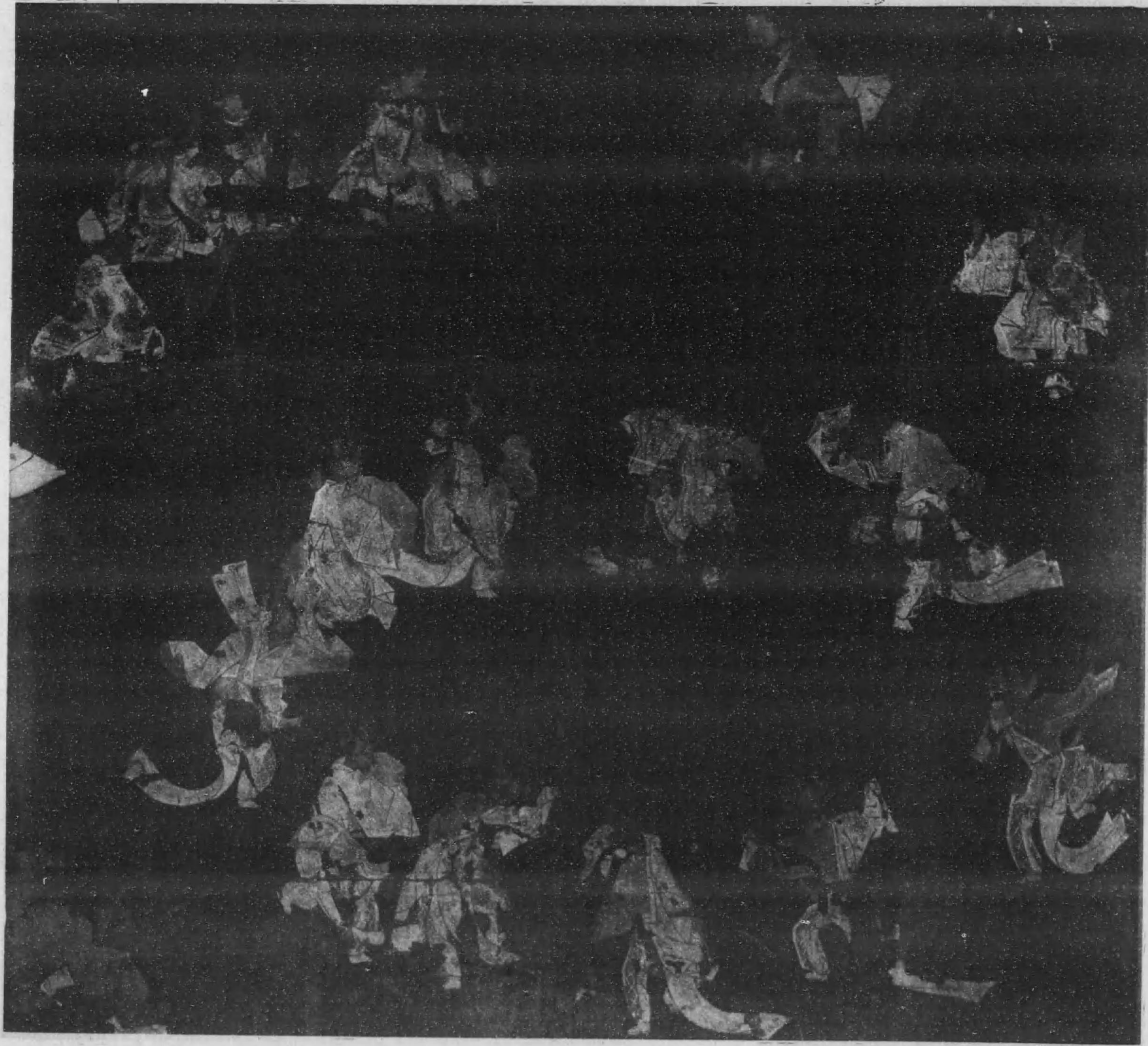
本圖は前圖同様松木氏の愛藏せる作者不詳の男舞の圖で紙本着色の畫幅である。

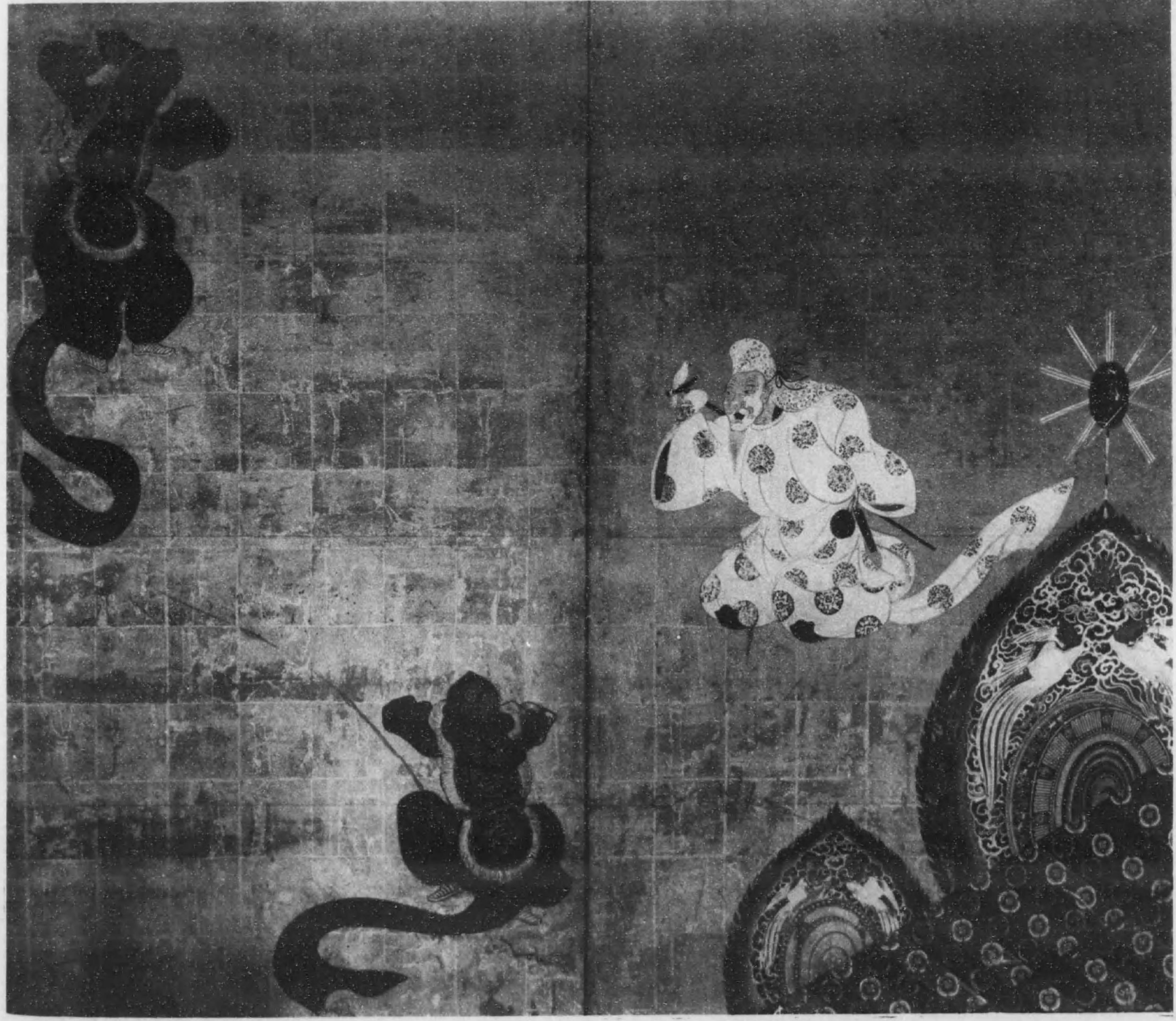
第十二圖 密陀繪の元祿踊

第十二圖及第十三圖は京都東紫竹大門佐々木猿吉氏珍藏の密陀繪にて吃又平の下繪せる盆踊りと傳へられて珍品で第十二圖は圓畫の全体で第十三圖は其中面の繪と合へた上部の部分とを掲載したものである、密陀繪は今其始めを詳らかにせぬが世に名あるものとしては法隆寺の王蟲の厨子及び東大寺に花籃が數口ある、此花籃は天平勝興八年に孝謙天皇の御寄附相成りたるものである、これは木質に布を面し漆を塗り表面は白色の密陀繪を施し更に蓮色の密陀繪を以て人物或は鳥獸花蝶草木等適宜に畫き裏面は黒漆の上に赤色の密陀繪を用ひて同圖を描きたるもので今尚ほ寶庫中にありと傳へられる其後桓武天皇の頃より梨子地時繪の器物はれ密陀繪は漸く廢れた、後奈良天皇の御宇越中縣波郡城端に漆工治五左衛門と云ふものあり、九州に遊び法を支那人に得て黒漆の上に五色の密陀繪を以て畫き爾來子孫其衣鉢を傳へて來りし、又天保年間京都に工人あり、密陀繪に在油を加へ朱を和して器物に塗り之を陰光塗と云つた、其色は淡紅色である、されど陰光塗は器物を陰のみであつた、本圖は果して何人の作なるや不名であるが人物の表現様式から見て吃又平と傳へる事も感らずしも無理ではない。



以上

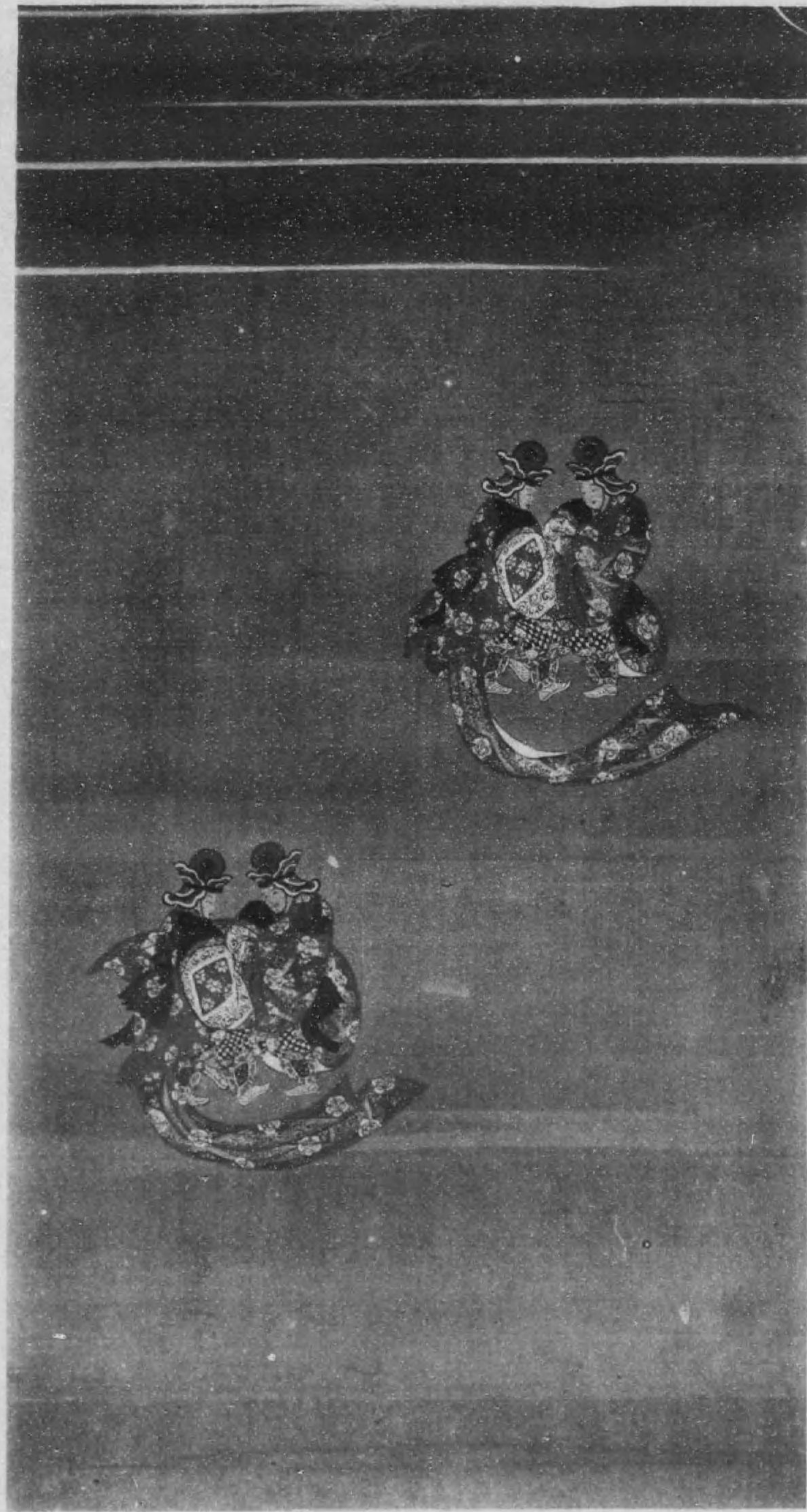
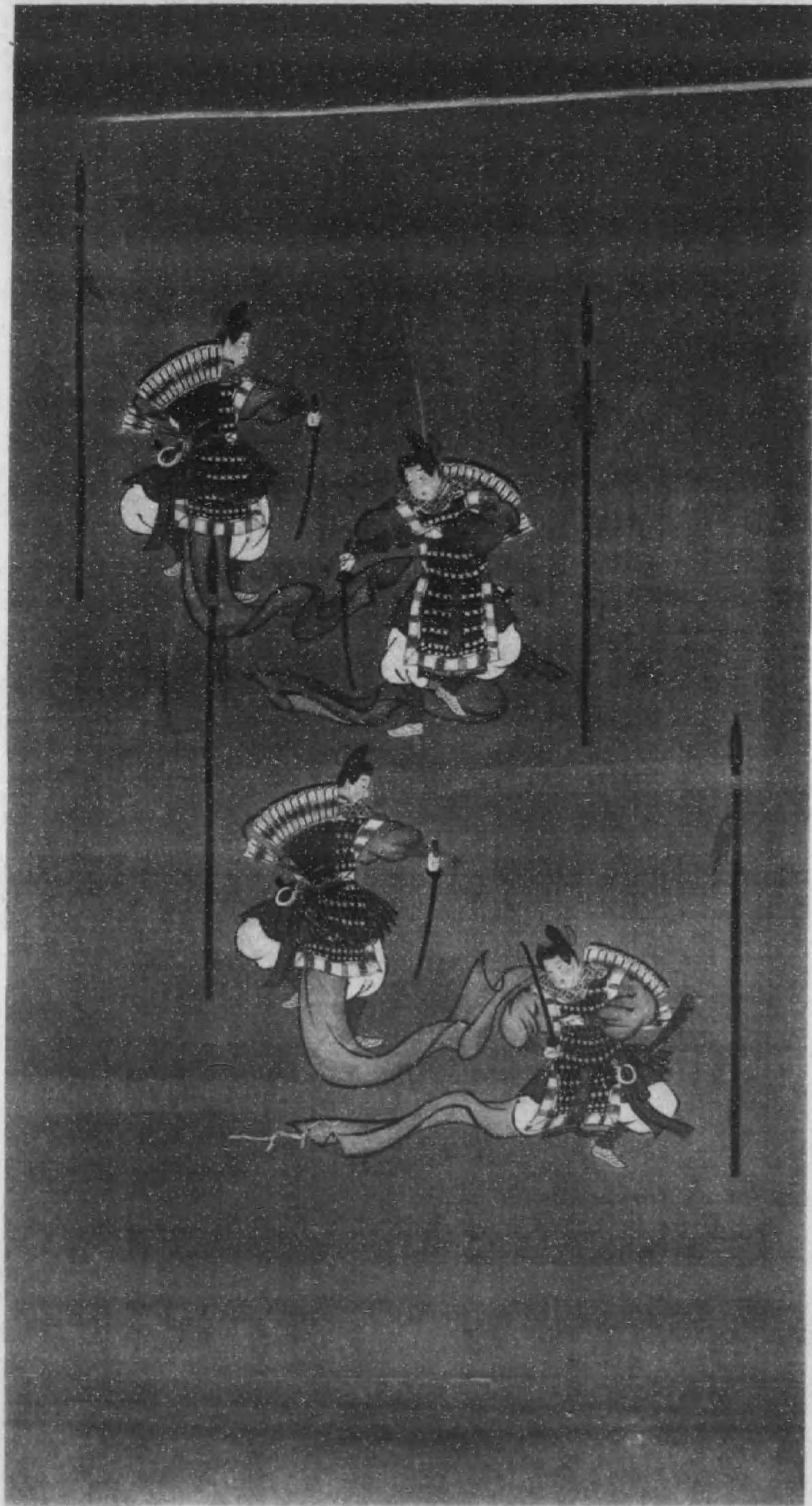


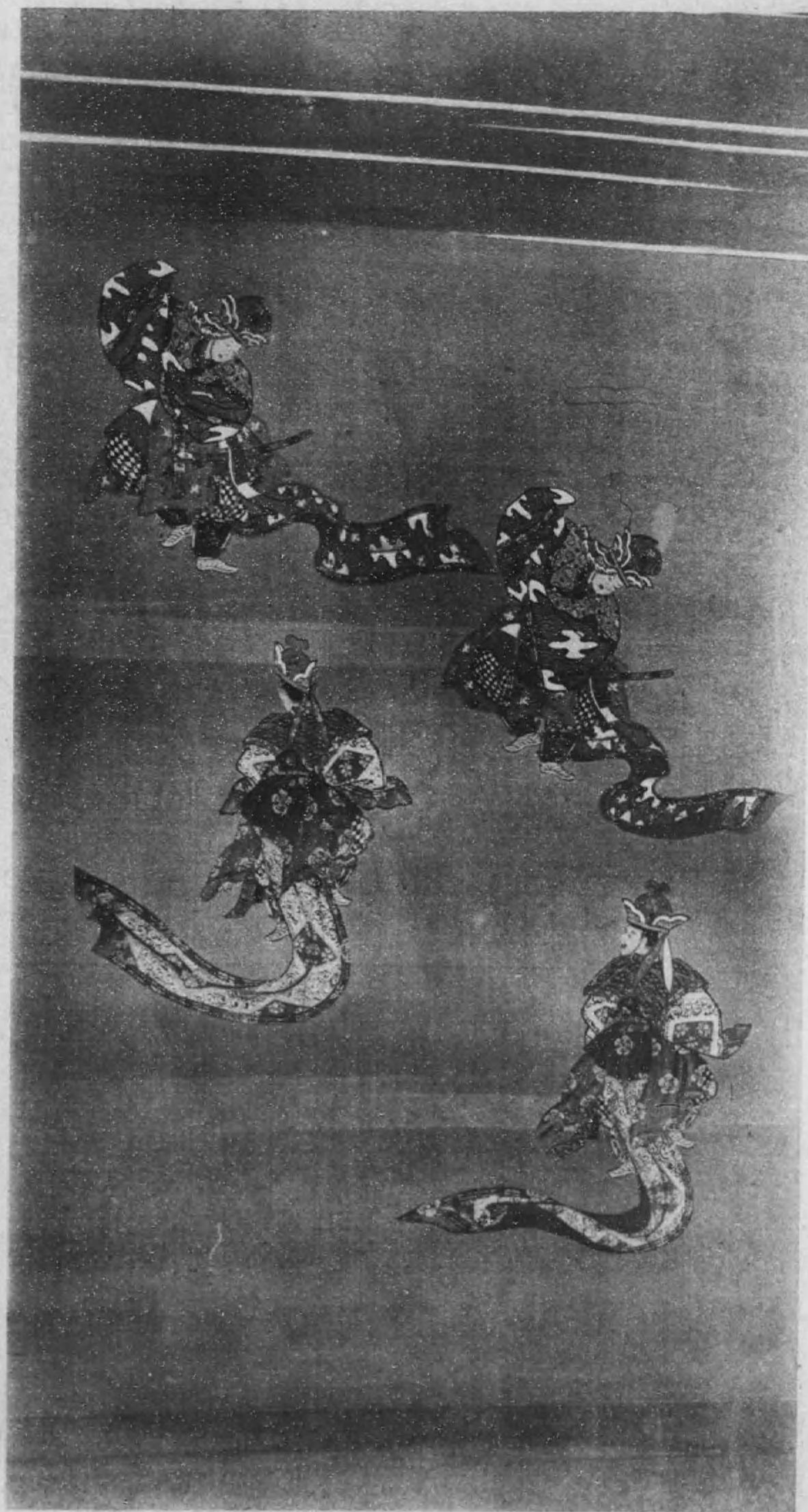




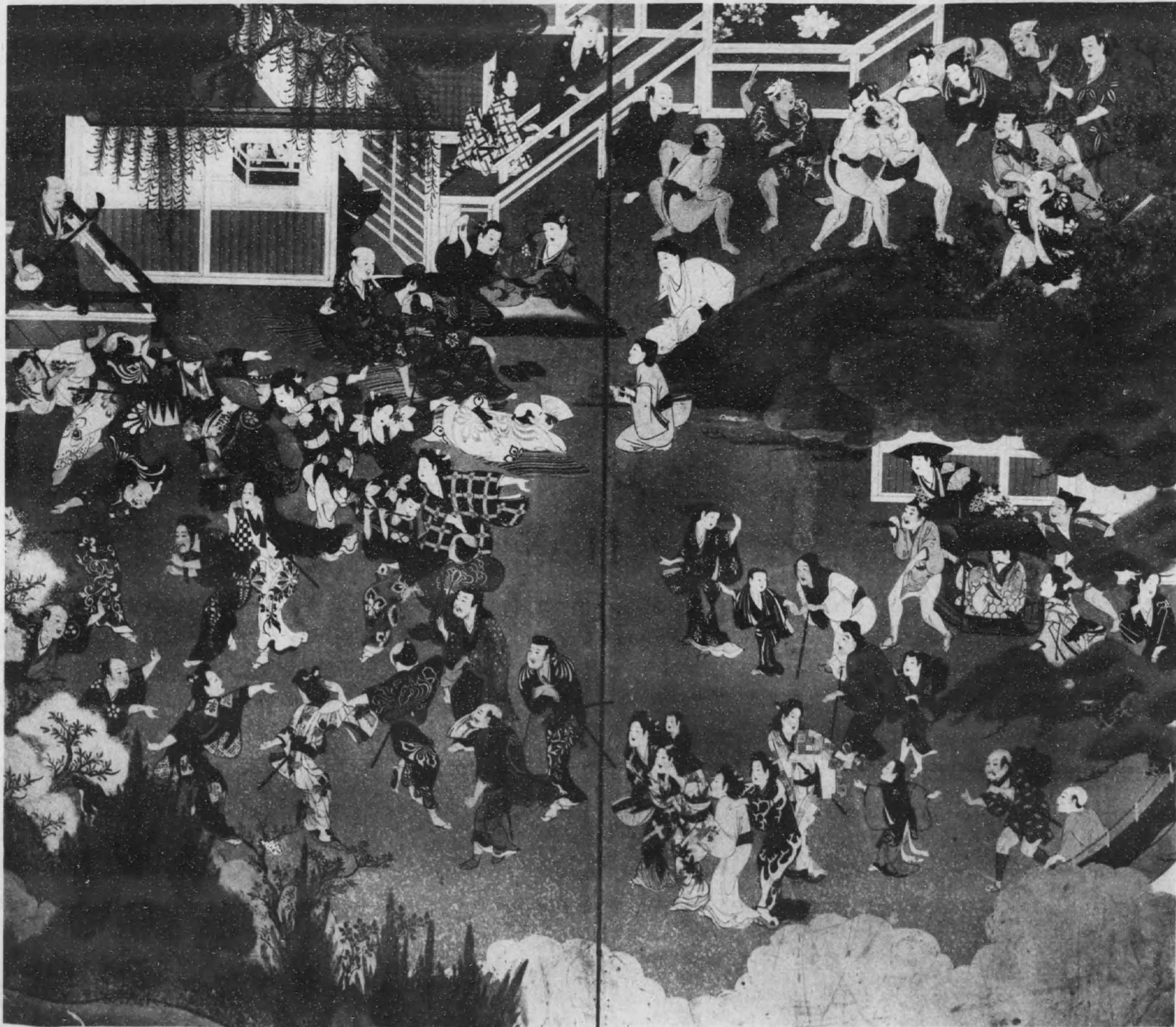






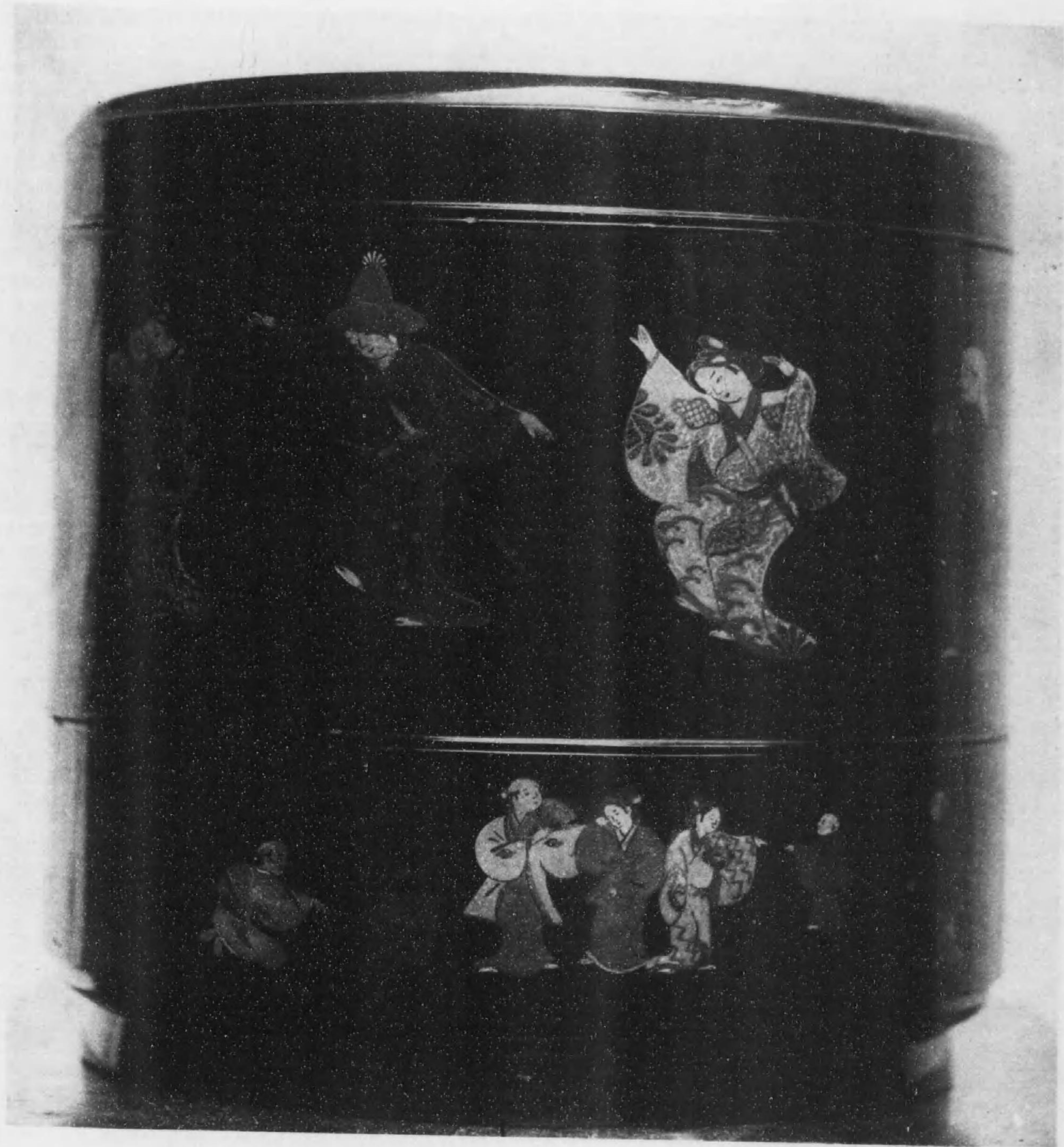














藝林書譜補遺編纂について

藝林書譜一度び世に出づるや書材の分類編纂は幸に江湖諸賢の喝采を博し巻を重ねる事上下二編廿四集に及び近畿の名書珍什あげて網羅し我國最初の一大書引として内外に誇るべき大出版が完結せむとするのであります。

今や本書譜の終結を見んとするに際し曩に本院寫真班が幾多の困難をかゝかひ苦心撮影せる原版中其の取材其の構圖其表現の上より到底捨つるに忍びざる拾有三葉を精選し茲に補遺の巻と銘して本書譜の最後を飾る事としました然れども觀者の趣味思想目的等に於て多少共選程あり差別あるは是れ當然の事にして随つて本集好惡の批判も亦免れ得ざる處なるが而も畫面の一隅に潜む特種の藝術味を看取する事は萬人共通の鑑賞が行はるゝものである事を確信し茲に本巻の發行を敢てしたのであります。

大正十二年十月

編者しるす

補遺内容目次及略解

第一圖 傳永徳の松梅圖

兩圖共に泉州堺市臨濟宗東福寺派大安寺方丈の國寶金碧換繪にて狩野永徳の筆と傳ふるもの、昔ては小學讀本に「松梅」の圖に萬家の名を刻み込んだのは實に本圖であります。

第二圖 吃又の風俗圖

本圖は洛西花園妙心寺塔頭東海本庵秘藏の傳吃又筆十二月枕屏風中六月の部分にて紙本彩色の名畫であります。

第三圖 彫刻の風雷神

本圖は京都三十三間堂安置の國寶彫刻にて風神及雷神である、二神は廿八部衆の内にて鎌倉時代に於ける雲慶湛慶の一派の作と記録に明らかであるがそれ以上は今尚不明である、何れにしても雲慶湛慶等在京時代の一大記念作にて京都に於ける群像として、乃至名作として共に特筆すべきものである。

第四圖 光琳の玉川圖

本圖は洛北百萬遍知恩寺所藏の光琳筆紙本六玉川繪卷の一圖で純然たる水墨畫であります。

第五圖 安民玉洲米偃の蘭と萬年草

本圖は京都北野神社藏蘭、と萬年草の金色紙張交六曲一双の内より複製せるものにて上右圖は安民筆干綱と稱する蘭、上左圖は玉洲筆楸姫と名くる蘭、下左右二圖は久保田米偃の筆になる萬年草であります。安民玉洲二氏のものには當時(明治初年)最も新らしき眞摯なる寫生よりなり米偃氏のものには筆墨粗野なる間、自ら別種の藝術味がある、總じて標本若くは粉本氣分は免れざるが此種のもの他に類例少なきが故に特に掲載したのであります。

以上

第七圖 光信の俊基卿東下りの圖

本圖は京都市松本番右衛門氏藏の團扇型泥入紙本墨畫の幅にて傳土佐光信筆俊基卿東下りの圖であります。幅が二三の從者と共に東へ發途さるゝ寂寥の情緒は全幅を歴し看者をして泣かしむるものがある。

第八圖 筆者不詳の老梅圖

本圖は京都市に於ける素人寫眞界の元老某氏の所藏せる墨畫の幅にて遠川中期の狩野派の作品と推考さるゝが作者の姓名不明なる點に於て幾多參考に資するものがあります。

第九圖 傳光信の紅葉狩

本圖は京都本團寺所藏の紙本着色六曲屏風にて土佐光信の筆と傳ふる紅葉狩の圖であります。

第十圖 法華曼陀羅

本圖は城南瓶原新義真言宗海住山寺秘藏の絹本着色法華曼陀羅にて筆者は不詳なるも鎌倉時代の名作である。本圖は最年國寶に指定され今は京都帝室博物館に出陳されて居ます。

第十一圖 永徳の唐美人

本圖は洛東南禪寺清涼殿鳴瀧の間の障壁畫にて永徳の筆と稱せらるゝもの、作風極めて穩健にして傳彩亦典麗なるもの、保存もよく頗る美はしい大作であります。

第十二圖 傳光信の群馬圖

本圖は京都本團寺所藏の紙本二曲屏風の一部で光信の作と傳ふる半双のものであります。

第十三圖 詩繪の燕子

本圖は洛東東節寺所藏の梨子地金箔詩繪の眞坦に燕子の圖にて現存莖裏に施されたる徳川中期のもので京都帝室博物館に寄託されて居る。

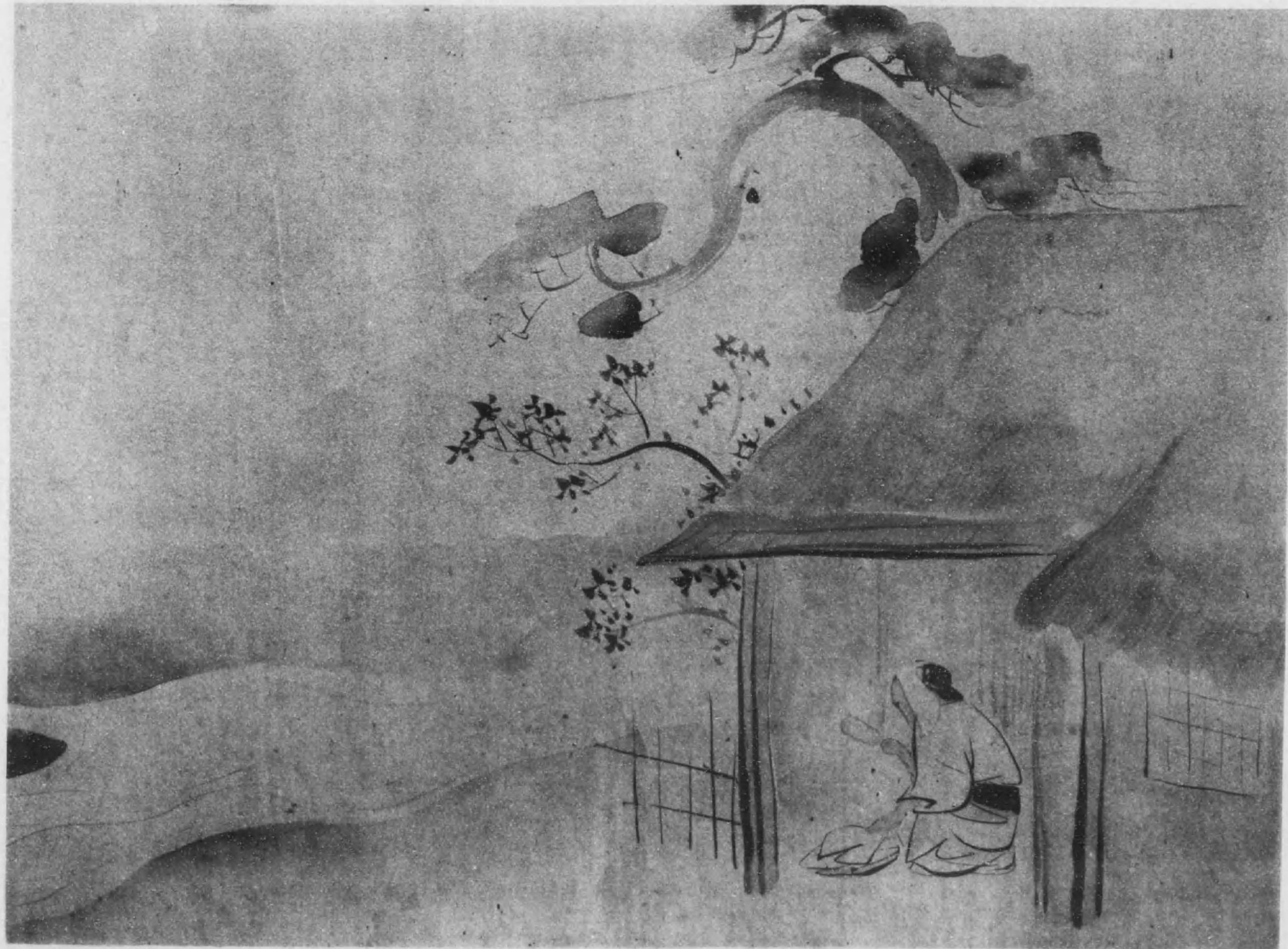


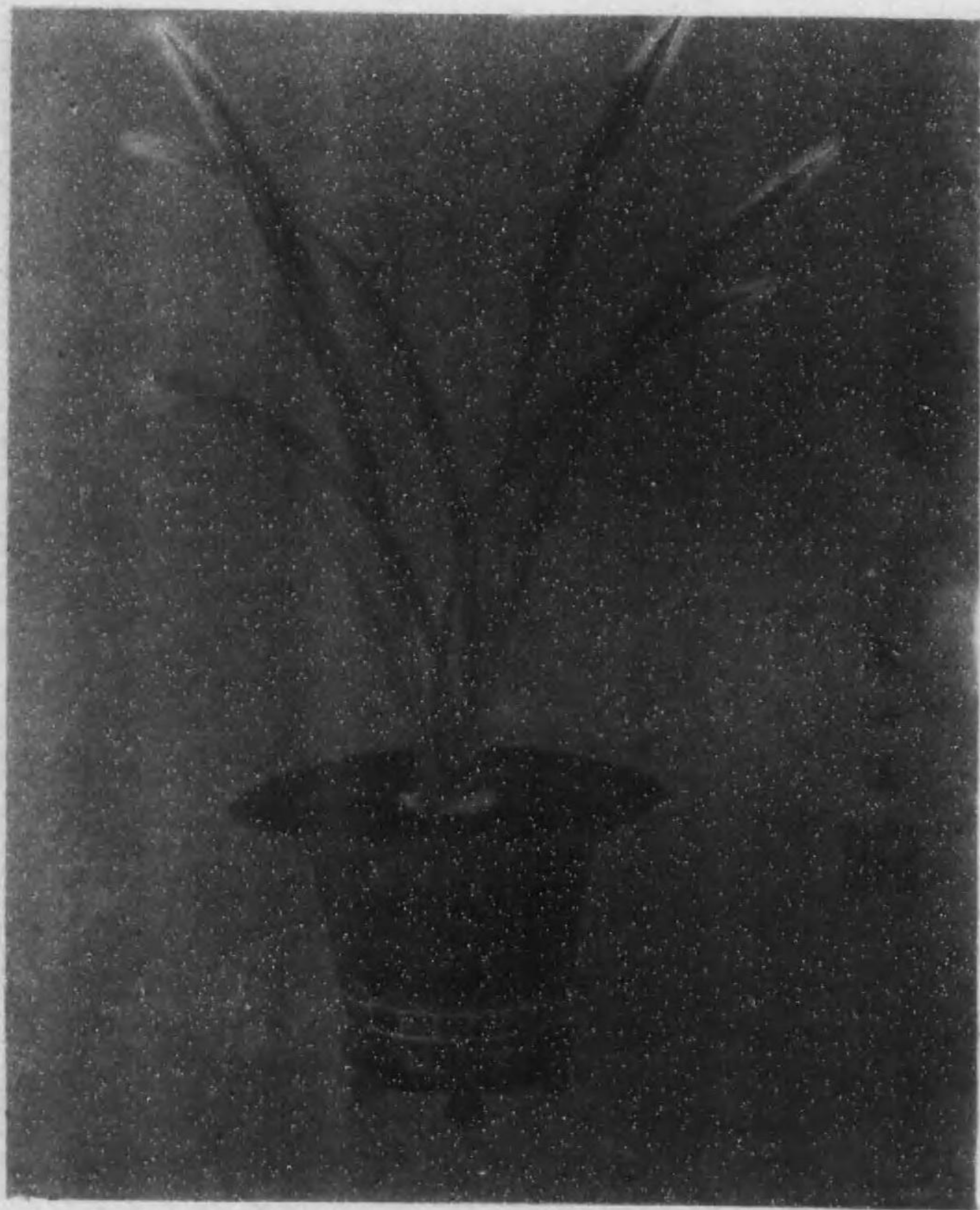


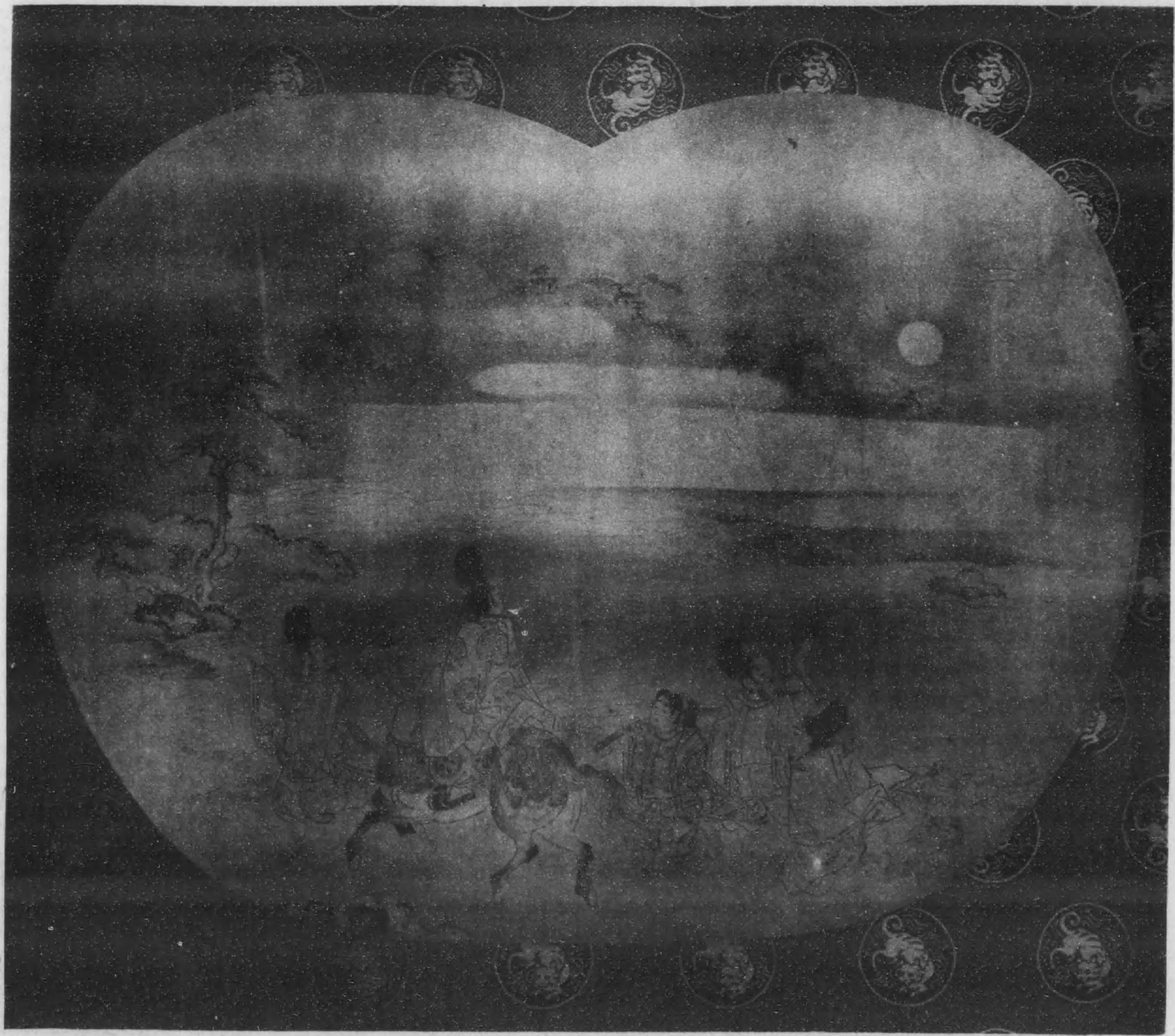




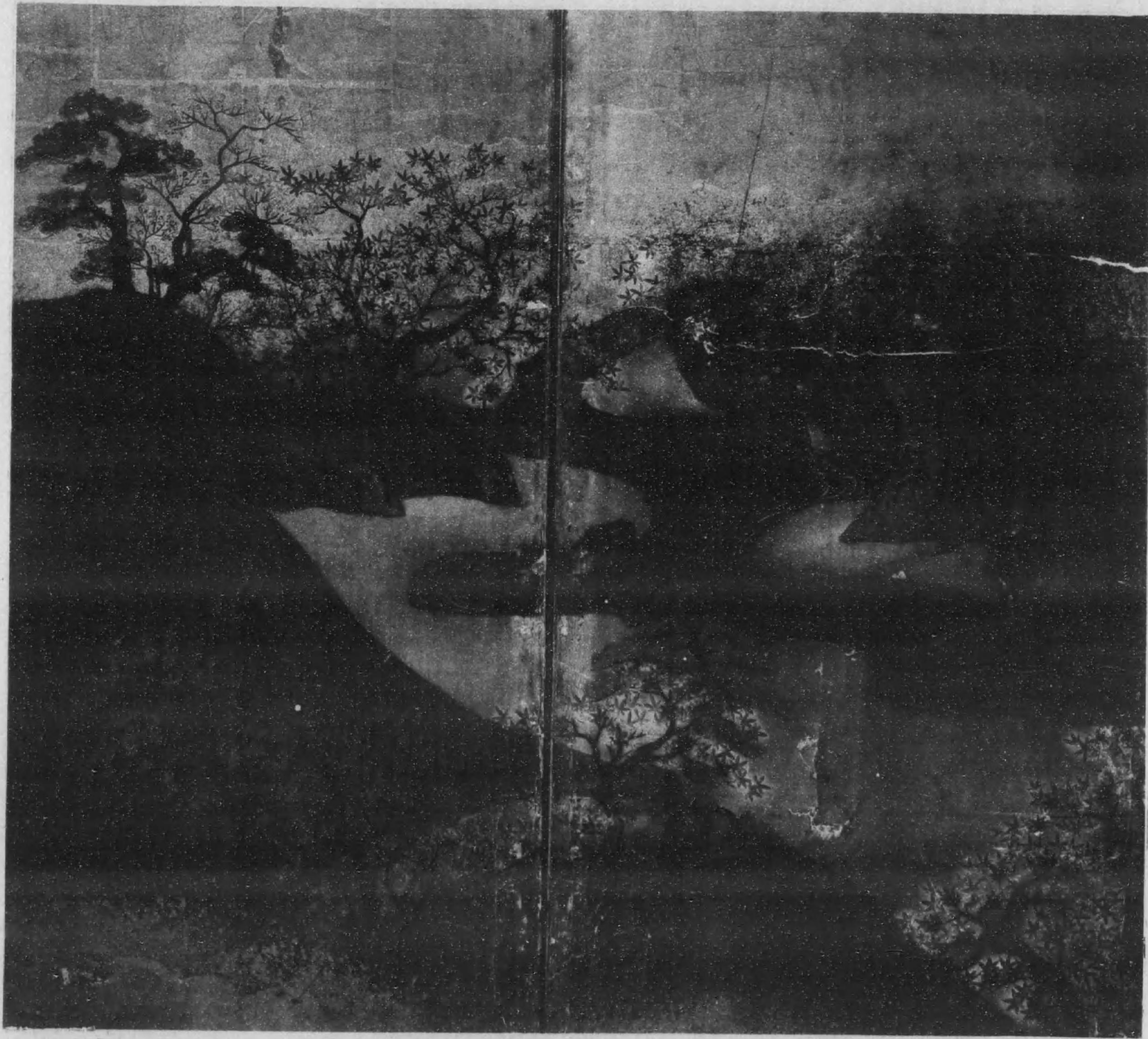


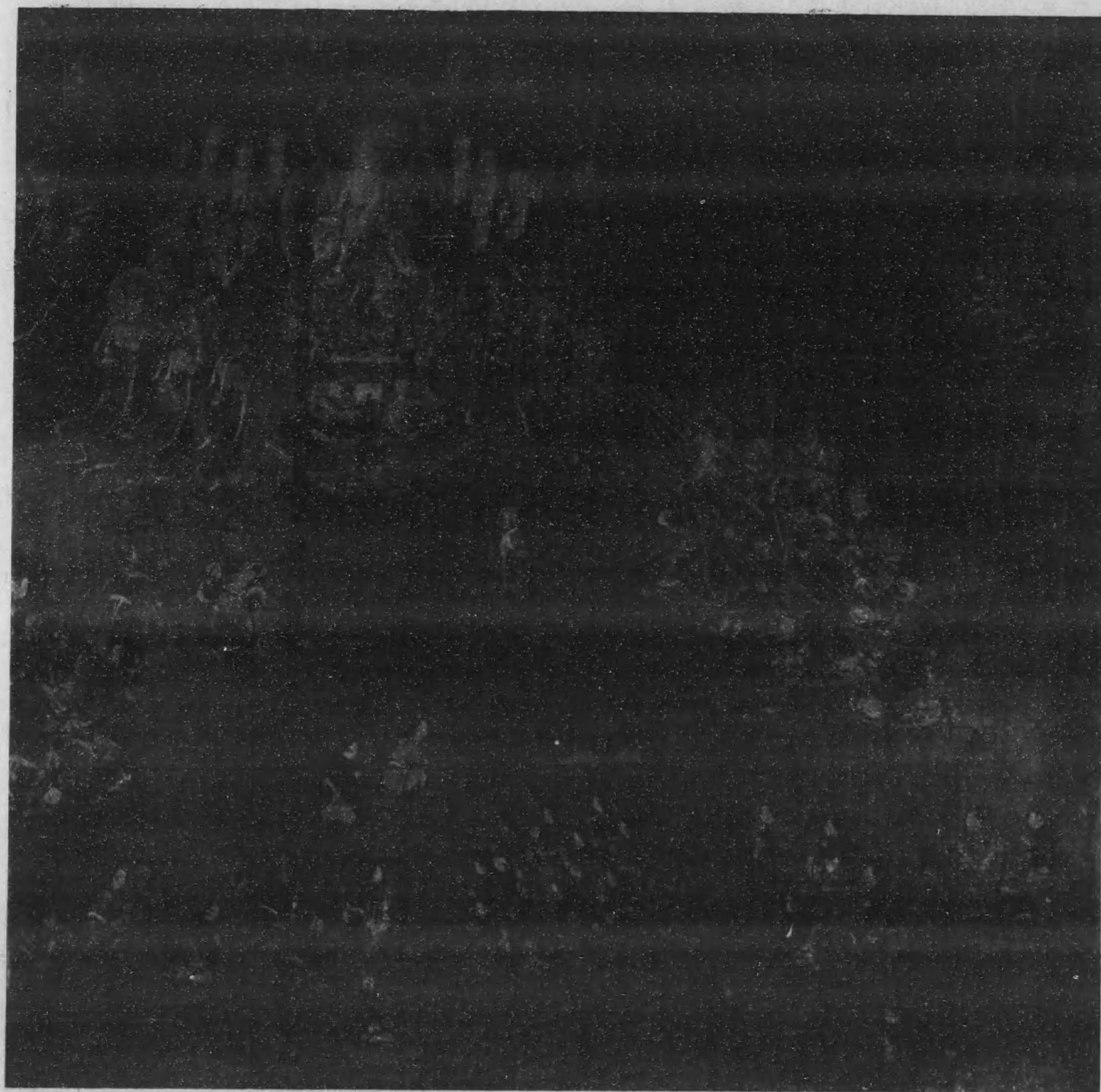




















大正十二年二月十日印刷
 大正十二年二月二十日發行
 實價一部金拾圓也

編輯印刷兼 發行人 京都市油小路下立賣南入 中野彌吾

印刷所 京都市油小路下立賣南入 佛教藝術院製版部

攝影者 京都市綾小路高倉西入 藤田悟一

發行所 京都市油小路下立賣南入 佛教藝術院

番付口座穴版五二〇六番

1086230

大正十年九月五日印刷
大正十年九月十日發行
定價一部金參圓

編輯兼發行者 中野彌吾

印刷者 京都市竹屋町河原町東人 野村幾之助

印刷所 京都市高倉四條下ル 鳥居西湖堂

撞影者 京都市綾小路高倉西人 藤田悟一

發行所 京都市油小路下立賣下ル 佛教藝術院

電話口座六版五二〇六番

大正十二年十月廿五日印刷
大正十二年十一月一日發行
售價金參圓也

編輯兼發行者 京都市油小路下立賣南人 中野彌吾

印刷所 京都市油小路下立賣南人 佛教藝術院製版部

撞影者 京都市油小路高倉西人 藤田悟一

發行所 京都市油小路下立賣南人 佛教藝術院製版部

電話口座六版五二〇六番

大正十二年十月廿五日印刷
 大正十二年十一月一日發行
 價金參圓也

編輯印刷
 兼發行者 中野彌吾
 京都市油小路下立賣南入

印刷所 佛教藝術院製版部
 京都市綾小路高倉西入

撮影者 藤田悟一
 京都市油小路下立賣南入

發行所 佛教藝術院出版部
 總發行者 藤田悟一
 京都市油小路下立賣南入

大正十二年十月廿五日印刷
 大正十二年十一月一日發行
 價金參圓也

編輯印刷
 兼發行者 中野彌吾
 京都市油小路下立賣南入

印刷所 佛教藝術院製版部
 京都市綾小路高倉西入

撮影者 藤田悟一
 京都市油小路下立賣南入

發行所 佛教藝術院出版部
 總發行者 藤田悟一
 京都市油小路下立賣南入

終